地域におけるサステナブルな創造活動とウェルビーイング ～「BGAP2023 海と陸とウェルビーイング 幸せは手仕事にやどる」を事例として～

Sustainable Creative Activity and Wellbeing in the Region － As A Case Study of ‘The Sea , Land and Wellbeing: Happiness is found in Handicrafts’ －

水谷由美子*　下川まつゑ**　原田裕作***

MIZUTANI Yumiko*, SHIMOKAWA Matsue**, HARADA Yusaku***

要旨

ブルー＆グリーンアートプロジェクトは海と陸を繋げて地域のサステナブルな振興を図ることを目的として2020年から活動を開始した。今回はウェルビーイングの視点を導入し、テーマを「海と陸とウェルビーイング　幸せは手仕事にやどる」とした。

今回は、このプロジェクトにおいて報告された「山口のサステナブルな手仕事の伝統とデザイン」を中心に、従来の手仕事とデザインの間にあるジレンマなどを考慮しつつ、手仕事が人間にもたらす精神と身体及び社会における良好な状態であるウェルビーイングについて検討したものである。同時に、「幸せは手仕事にやどる」展における作品のアーカイブをするとともに、新たな手仕事の表現について検証する。

手仕事の伝統と継承について、ワークショップは出会いの場であるとともに、継承者の発見にも役立てられることが示された。

Executive Summary

The Blue & Green Art Project initiated its activities in 2020 with the goal of fostering regional sustainability through the connection of sea and land. This time, we introduced the perspective of wellbeing. The theme for this year's project was "Well-being by Sea and Land: Happiness is Found in Handicrafts".

This thesis focuses on ‘Sustainable Handicraft Tradition and Design in Yamaguchi’, examining the mental, physical, and social wellbeing that handicrafts bring to people. It explores the dilemma between conventional handicrafts and design, delving into the study of wellbeing. Simultaneously, it archives presented in the exhibition ‘Happiness is Found in Handicrafts’ and explores new expressions of handicrafts.

Concerning the tradition and transmission of handicrafts, the workshop was revealed as both a place of encounter and a valuable tool for discovering the inheritors.

キーワード: サステナブル　創造活動　ウェルビーイング　ブルー＆グリーンアートプロジェクト　手仕事

Key words: Sustainable, Creative Activity, Wellbeing, Blue & Green Art Project, Handicrafts

*　山口県立大学名誉教授
**　山口県立大学国際文化学部実習助手
***　山口企画デザイン研究所研究員
*　Emerita Professor at Yamaguchi Prefectural University
**　Trainee Assistant in the Faculty of Intercultural Studies at Yamaguchi Prefectural University
***　Researcher at Yamaguchi Planning & Design Institute

Ⅰ 研究創作概要

近年では海の問題と陸の問題を連携させて地域文化・産業の活性化をする動きがあり、漁業者や海に関わる生業をしているあるいは環境問題に取り組む人々の間で、実践が行われている。ブルー＆グリーンアートプロジェクト（以下ではBGAP）の活動は2020年から開始され、その間に行われた５回のシンポジウムで、海と陸の連携した取り組みや陸における環境省の地域循環共生圏の創造のヴィジョンさらにアパレル分野でのリサイクルに関する最先端イノベーションなどについて紹介があり、議論がされた。

特に株式会社JEPLAN岩元美智彦会長が主張された概念「正しいから楽しい」は、これからの環境問題の重要なキーワードであると考える。そこで、人々が概念として環境問題を考えることは重要であるが、それだけではなく日常生活の中で、いかに楽しく実践するかということが課題である。その楽しさが個人個人の幸せにつながっていくことが重要だと考える。

そこで、ブルー＆グリーンアートプロジェクト実行委員会が主催する今年度のブルー＆グリーンアートプロジェクトBGAP 2023のテーマを「海と陸とウェルビーイング～幸せは手仕事にやどる～」（2023年10月22日　ラポールゆや、長門市にて開催された）とした。ウェルビーイングの概念と海と陸の環境問題の実践とをつなげて、環境と共存する人間にとって両者の良好な状態とは何か、人間にとっての幸せはどのように獲得されるかなどに焦点が当てられた。

上記プロジェクトの副題である「幸せは手仕事にやどる」は、以下の２つの手仕事から着想された。その一つは庶民の生活における服飾及び染織分野では、歴史的には家庭内の手仕事に基づいていたこと、他方では地域の手工芸が無名の職人の手仕事に起因していることである。

本論では上記プロジェクトの中で特に筆者の事例発表「山口のサステナブルな手仕事の伝統とデザイン」について再考する。また、山口ファッション＆テキスタイル研究所及び山口企画デザイン研究所のそれぞれの研究員による展覧会について写真とコンセプトについてアーカイブする。さらに展覧会ディレクター、下川まつゑとシンポジウムの舞台ディレクターの原田裕作が伝統的な手仕事の技術を用いた各自の作品について検証する。

加えて上記プロジェクト「ブルー＆グリーンアートプロジェクトBGAP2023」についての、基調講演やシンポジウムの全容は、最後に付録として文字起こしをした。それを編集したものを掲載する。また、YouTubeで配信しているので参考にされたい。

展覧会の企画において、陶芸の展示があり、それらは安倍昭恵BGAP会長と筆者が企画したものである。ここではそれらの詳細については言及しない。

Ⅱ 山口のサステナブルな手仕事の伝統とデザイン

ここでテーマにしている手仕事とデザインは相矛盾した概念でもある。

産業革命はものつくりについて、手仕事にとって代わり機械生産を普及させた。しかし、粗悪品が大量生産されたことへの反省として、中世の伝統的な技術への回帰が行われた。そこでは芸術性は高まったものの、大衆を対象とするコストには至らず矛盾も生まれた。

以上のような19世紀後半から末にかけてイギリスで行われたアーツ＆クラフツ運動に内在する問題は、時代を超えて現代でも同じ矛盾を抱えている。

（1）手仕事と個性そして創造する喜び

ウィリアム・モリスなどのアーツ＆クラフツ運動の影響を受け、民芸運動の主導者であった柳宗悦は『日本の手仕事』の中で、手仕事が人間にとってなぜ必要なのか、そして何をもたらすのかについて以下のように述べている。

「なぜ機械仕事とともに手仕事が必要なのでありましょうか。機械に依らなければできない品物があると共に、機械では生まれないものが数々あるわけであります。

凡てを機械に任せてしまうと、第一に国民的な特色あるものが乏しくなってきます。

機械は世界のものを共通にしてしまう傾きがあります。（中略）それに人間が機械に使われてしまうためか、働く人から悦びを奪ってしまいます。（中略）

その（手仕事）優れた点は多くの場合民族的な特色が濃く現れてくることと、品物が手堅く親切に作られることとであります。

そこには自由と責任とが保たれます、そのため仕事に悦びが伴ったり、新しいものを創る力が現れたりします。

それ故手仕事を最も人間的な仕事と見てよいでありましょう[注1]。」

日本も明治時代以来、あらゆる分野で機械化に向かい、手仕事が失われようとしていた。

柳は第２次世界大戦前の1943年にこの書の内容を完成させている。それまでに日本全国の地域の手仕事を

訪ね歩き、収集し、この書物を書いた。

柳はイギリスのアーツ＆クラフツ運動を学ぶとともに、朝鮮の陶芸などに興味を持っており、世界的視野で手仕事の意義を問う立場から、手仕事が機械に置き換わってしまうと、国民的な特色がなくなること、また逆の言い方で手仕事の優れた点は民族的な特色が濃く現れることだと言っている。

特にウェルビーイングの観点から、上記の言葉の中で、手仕事における働く喜びや新しいものを作る力が現れるという点に着目したい。

柳の全国の手仕事を求める行脚は、地域の特色を発見し、評価することになる。

(2) 柳宗悦が発見した山口の手仕事

柳宗悦は山口において瀬戸内海側、内陸部、そして日本海沿岸と歩いている。そこで、柳が発見した山口の手仕事は以下のようなものであった。堀越・佐野の窯場（防府市）、萩焼（萩市）、小月の窯場（下関市）、長門細工：紙縒（かみより）の総称（長門市）、徳地半紙（山口市、旧周防国佐波郡島地村）、赤間硯（下関市、厚狭地方）[注2]である。

以上の手工芸は堀越窯と長門細工以外は現在も継承されている。かつて地域産業であったものが、今は数軒あるいは１軒のみになった手工芸がある。地域の地場産業としての衰退は、機械化や海外からの輸入により、安価な商品が市場に出回ったことに起因する。

しかしながら、手仕事によって生まれる工芸品あるいは商品は高価なものになった。萩焼など陶芸は日常雑記の他により早い段階で芸術領域へと展開された。希少価値に裏打ちされた地域固有の手工芸は、現在は地域文化を代表する宝物として大切にされている。

写真1　相島の裂織ハンテン 萩博物館所蔵

(3) 生活着や仕事着に見られる山口のサステナブルな手仕事

日本の衣服の伝統は、持続可能な精神と結びついて、人々の生活スタイルの中に浸透していた。以下に示す、伝統的な染織や着物の手法は、山口固有のものではないが、それらは地域の事情を背景に、偏在し発達されてきた。

①　裂織による着物のアップサイクル

萩博物館で企画された特別展「100年の布～美しき襤褸の世界～」展において相島で使われていた裂織のハンテン（写真１）が展示された。裂織は相島のハンテンである。裂織の技法は全国に見られるもので、各地域で呼び名があり多様である。萩では裂織をツヅリあるいはツヅレと呼んでいる。技法的には襤褸になった着物を割いて糸状にして、それを撚って織糸にして緯糸に使う。経糸は麻や綿、時には絹の糸が使われる。写真１を見ると比較的幅広に裂いていることがわかる。

上記展覧会を担当した松尾優平の山口県における裂織・紙布の分布図（図版1）[注3]によると、裂織の存在が認められているのは現在の萩及び阿武そして徳地などの地域である。文献に記載されているのはそれらに加えて、須佐、阿東そして錦町などの各地域である。

木綿栽培や木綿織が盛んだった岩国や柳井周辺地域には見られない。ここでは地域と裂織り分布に関する因果関係について触れないことにする。

裂織は現代的な視点から、アップサイクルの手法として魅力的である。裂織制作の試みとして、展覧会「海をめぐるファッションの旅　Step By Step」[注4]において、服飾、タペストリーなどの作品が展示された。また、展覧会中でのワークショップでは観客を対

図版1　山口県における裂織・紙布の分布図
出典は注３

象に裂織のコースターが作られた。展覧会に作品を出展した学生やワークショップの観客が裂織を楽しんだことはアンケート調査における自由記述で幾度となく「楽しかった」という言葉が散見されたことからも明らかである。筆者もタペストリーをワークショップ内で作り、展示した1人である。初めて制作したが、非常に楽しかった。２日間で、約12時間かけて制作したが疲れを感じなかった。

糸が太いので短時間に織れることと色々な色の糸を自在に組み合わせることができるので、描写的な作品も可能である。参加者は皆、初心者のレベルであったが、フィンランドで同様の技術、ポッパナ織を学んできた原田は糸から染めて制作した作品を出品した。

こうした創造活動はサステナブルであるという意味で知的な好奇心に応えるものであるとともに、制作者は創造力が掻き立てられ、作る悦びが湧いてくる。

②　紙布と紙子から和紙の服飾造形

山口県の代表的な手漉き和紙の産地の一つは山口市徳地の藤木地域である。江戸時代には西日本で最も大きな産地であり商いも行われていたことが知られている。1973年の徳山のコンビナート地帯の仕事が始まるまで、藤木地域のほとんどの家庭で紙漉きが農閑期の仕事として行われていた。

ここで話題にしている紙布と紙子の遺品を徳地地域で筆者は見つけていない。噂で聞いている程度である。東北の白石手漉き和紙のアトリエを訪ねた時に、実際に現代まで手漉き和紙で、着物、半纏、帯及び座布団カバーなどを作っており、それが日常的に使われていたことを知った。

先に例示した萩博物館の展覧会で、紙子が展示されていた。山口県内の博物館や資料館ではまだ遺品が見つかっていないということで、先の展覧会では山口県と隣接している島根県津和野町にある日原歴史民俗資料館所蔵の紙子が展示されていた。そこで、日原に出かけ、調査してきた。日原は山口県阿東町と接しており、現在の9号線沿いにある。海に面する益田から車で30、40分程度の山深い場所にある。日本一の清流に選ばれた高津川が流れている。

紙子の遺品を紹介した小杉紗友美（津和野教育委員会文化財係長）によると、日原ではかつては紙漉きが盛んであった。現在のように布や衣類が容易に手に入るまでは、木綿も高価であり手に入れづらい状況であった。そこで、紙布が作られたのではないか。実際に筆者の観察では、紙子（写真2-a.b.c）は、何度も継ぎ接ぎされて長年使われていたものと理解される。この紙子は腰丈くらいの短い半纏なので、コシキリと呼ばれている。それ自体が襤褸になっていて、存在感がある。

この仕事着は作り手が家族の可能性が高い。家族のために紙を切り、糸に撚り、藍染め（自宅か紺屋かはわからない）をして、布を織り、衣服へと仕立てられたのだ。山口では、木綿が手に入りやすい地域では裂織の事例が見られない。日原の地理的条件や経済背景などから、木綿は高価であり、紙子が作られた経済状況が推測される。

写真2-a　コシキリ 表 日原歴史民俗資料館所蔵

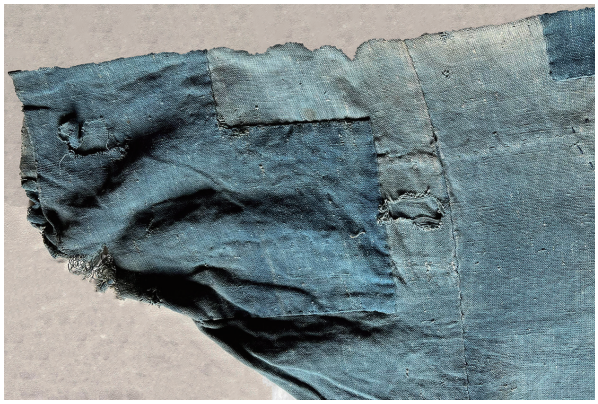


写真2-c　コシキリ 細部

写真2-b　コシキリ 裏

筆者は裂織の項で述べた展覧会のタペストリー制作で、主に自分で玉ねぎの皮で染めたガーゼ布と和紙を用いた。その時に、徳地和紙を切って糸にしたのだが、それほど撚りをかけていなかったが、非常に丈夫で切れるということがなかった。その丈夫さに驚いたほどである。紙というと布に比べて脆いという印象を持つが、実際は丈夫で上記のコシキリのように、長い時間使われることができる素材なのだ。

③　縞織の伝統からmompekkoの開発

山口県の柳井市には柳井縞の伝統がある。柳井縞は岩国藩によって1760年（宝暦10年）から織物の検印制度が始められ、品質が保証されたために、広く国内各地に輸出され知られていた。明治時代の後半に徐々に衰退し、大正時代初期に消滅した。手織りから機械織りへの移行、安価な染料や糸あるいは布の輸入などで、従来のビジネスモデルが有効でなくなったのだ。もちろん、新たに開発されたあるいは他地域からもたらされた織のスタイルが試されたが、最終的には消滅に至った。

そして平成の初め頃、織機や縞帳（写真3）が発見されたことをきっかけとして、復興の機運が生まれて平成5年（1993年）に柳井縞の会が発足された。織の規模を拡大するために、山口県立柳井工業高校（現柳井商工高校）に依頼し、織機が作られた。柳井縞の会は現在、柳井市が運営する展示会場、染色及び織のワークショップが行われるやない西蔵の運営を担当するとともに、その近くにアトリエと販売所を構えている。かつて手織りから機械織へと移行したことが消滅の引き金になったことから、染色から織りまで一貫して手仕事で行っている。

歴史的にみると柳井縞と呼ばれる織物は現在の柳井市のみで織られていたわけではない。白木綿織の産地で有名だった周防大島では、久賀地域を中心に縞織がされていて、大島縞とも言われていたが、柳井に行くと柳井縞になった。このように、柳井市周辺の田布施や熊毛などでも縞織が多く織られた。

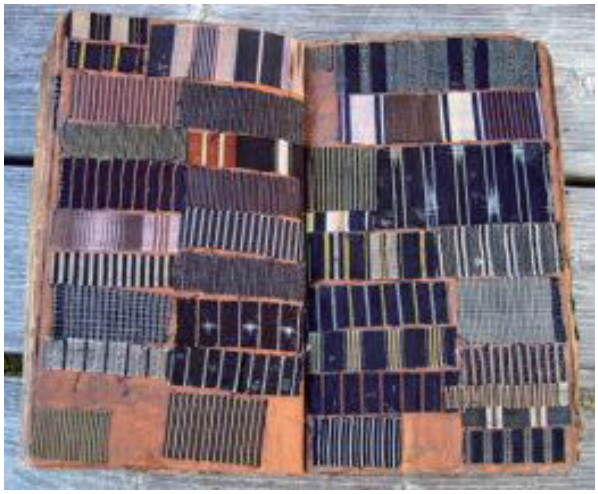


写真3　柳井縞の縞帳

2003年には筆者は柳井縞の会から依頼されて初めて柳井縞を使ったファッションショーをプロデュースし、県内外にその存在をアピールした。その後も着物やドレスのデザインのために柳井縞の会のメンバーとのコラボレーションを行い、着物やドレスを発表してきた。

2013年から農作業着の開発プロジェクトを開始した。その頃はプロジェクトであったので、１反が6万円程度の高価な柳井縞で制作を行った。しかし、これでは人々のための農作業着、特に農業をしている女性に人気のモンペを商品開発することはできない。元々は木綿織の柳井縞は庶民の着物や仕事着として使われていた素朴で丈夫な布であった。

そこで、筆者は企画デザイン研究室で、2014年からやまぐち縞として機械織の反物を織るプロジェクトを開始した。同時に手織りによる反物のデザインを試みた。柳井縞の会の石田忠男会長（当時）の協力を得た。一つの例では、金子みすゞの写真に見られる着物の縞柄を着想源に、マニラ麻の和紙糸と、藍染めを工場に依頼して制作した。そして白と藍の糸で織られた反物で、上下のアンサンブル（写真4-a.b）を制作した。

とはいえ、非常に高価なものとなり、上下のアンサンブルは数十万円程度の値をつけなければ採算が取れないという課題ができた。最も糸、染色、織についてはプロジェクトとして協力を得たもので、実際のビジネスとしては難しい内容である。

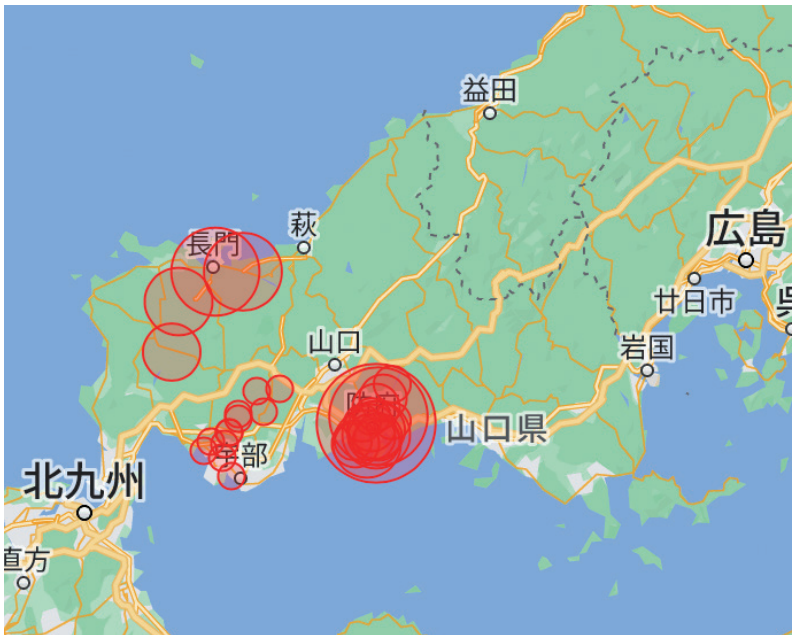
そこで、生活で着用が可能な農作業着モンペを改良して、mompekkoを開発した。これは販売価格が1万円程度の金額になった。山口県では機械織の産業が既に亡くなっていたので、久留米絣の工房に依頼してやまぐち縞を創作し始めた。詳細はここで述べる余裕はないが、最初に述べたように、現実に商品化するためには、手仕事による柳井縞による農作業着の製造はコスト面で難しい。普段着用の木綿織は高価だが、やはり普段着にしか着られない。絹ではあるが大島絣が正式な場所で着られないのとは異なるが、着物の伝統的な約束事などとの関係があり、現代生活への落とし込みが課題である。

柳井縞の会がワークショップとして観光客にコースターを織る機会を提供していることは、手仕事の楽しさを伝える素晴らしいことだと考える。

写真4-a　紙糸オーガニック藍染柳井縞アンサンブル
デザイン：水谷由美子　柳井縞：石田忠男

写真4-b　写真4-aの胸元部分のアップ

写真5　木綿織物改良乃証
元紺屋 田中すけろく商店
（大島郡外入村）所蔵



図版2　『防長風土注進案』のデジタル情報における「紺屋」の報告記述の集積図

④　紺屋（藍染め）

明治初期にはドイツの化学染料、イギリスの細綿糸の輸入がはじまる。1877年には西南の役で打撃を受け、粗製濫造により偽藍染め、偽唐糸が蔓延した。そこで、山口県は県内の繊維産業を守るために、組合を作り、木綿織物改良之証を発行した。主に対象となる大島、玖珂、熊毛三郡の染色業、製造業、販売業の３者を1886年にこの組合に入らせた。ここに示す証明書（写真5）は大島郡外入村の紺谷（周防大島ではこうやと読む）の田中すけろく商店が保存していた証書をあげておく。明治時代にすでに山口の行政がブランディングを手掛けていた好例である。

『防長風土注進案』のデジタル情報における紺屋の集積図（図版２）を見ると、現在の防府市に紺屋が集中していることがわかる。現在、防府市は富海地区を中心に藍によるまちづくりをしているが、その動機にはこの歴史的事実は入っていない。こうした歴史的事実を掘り下げ、活かして行けばまちづくりの説得力も高まるに違いない。

Ⅲ「幸せは手仕事にやどる」展について

1　展覧会概要

本展覧会では、「海と陸とウェルビーイング～幸せは手仕事にやどる～」をテーマに、ラポールゆやのコミュニティホールにて、服飾デザイン及び陶芸の作品展示を行った。

作品出展者はブルー＆グリーンアートプロジェクト実行委員会から依頼を受け、山口ファッション＆テキスタイル研究所Y-FATIや、山口企画デザイン研究所のメンバーから出展を募り、15名の作品を展示した。

また、特別友情参加として安倍昭恵BGAP会長、水谷由美子実行委員長の企画により、長門市出身の陶芸家である15代坂倉新兵衛氏（山口県指定無形文化財保持者）、坂倉正紘氏および山口出身の大和保男氏（山口県指定無形文化財保持者）の3名が作品展示した。

以下では、展示作品について写真、コンセプトとともに紹介する。次に、展示作品の中から２作品について取り上げ、サステナブルな視点から、伝統的な手仕事によって生まれる創作とウェルビーイングについて検証したい。最後に展覧会開催を通じた成果について述べ、まとめとしたい。

なお写真の解説は制作者が執筆したものであることを言い添える。

2 展覧会における作品

写真6　貝殻紋火焔鉢

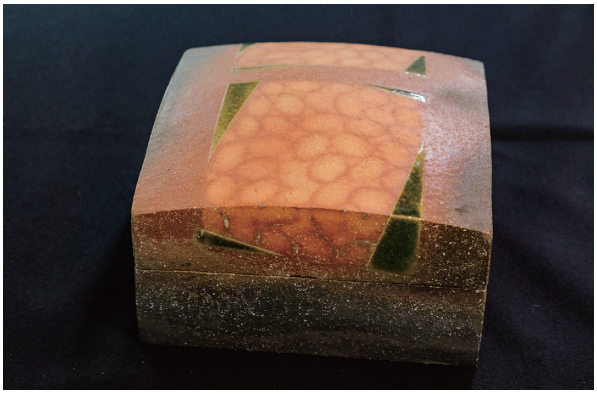


写真7　貝殻紋四方陶筥

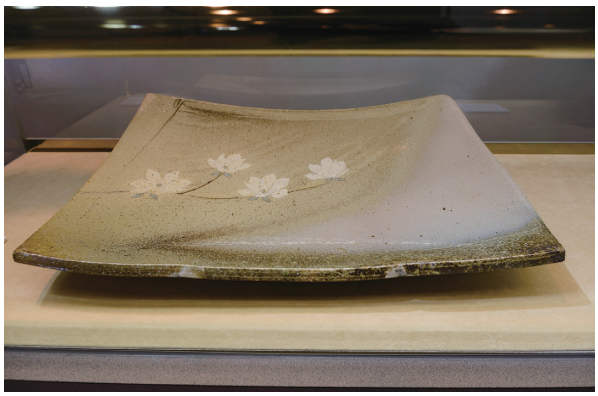


写真8　灰被絵皿

写真9　刷毛目花入

「貝殻紋火焔鉢」
大和保男（山口県指定無形文化財萩焼保持者）
古くは萩焼や唐津焼など、窯の棚板への熔着を防ぐため裏面の高台に貝殻を敷き焼成。そのため高台に貝殻紋が残ります。しかし当作品は裏面ではなく、表面に緋色の貝殻紋を映し出すという、たぐい稀な装飾です（写真６）。

「貝殻紋四方陶筥」
大和 保男（山口県指定無形文化財萩焼保持者）
陶器の筥です。土を刳り貫いて形成します。作品の表面に貝殻紋を残すという手法は世界にありません。茶系の地色と貝殻紋と緋色がよく融和し、希少価値的な奇妙な美的表現を醸し出しています（写真７）。

「灰被絵皿」
15代 坂倉 新兵衛（山口県指定無形文化財萩焼保持者）
萩の土に、異なる色土を用いて絵付けを施し、登り窯の、薪の飛び交う床近くに置いて焼くことで、下部が薪の灰に埋もれて黒く炭化し、絵皿に奥行きのある独特の表情を表した、15代新兵衛を代表するシリーズのもの。今作品は木蓮を描いている（写真８）。

「刷毛目花入」
坂倉 正紘（陶芸家）
赤土でロクロをひき、その上に萩の伝統白土である大道土を刷毛で塗り付けたもの。表面の青い釉薬は、植物の灰由来の自然な色味。下部の連続した穴の意匠は、作家の得意とする粒紋と名付けたもので、穴に溜まる青い釉薬が、程よくアクセントとなっている（写真9）。

写真10　天、地、そして海

写真11　花のマーメイド

写真12　Evolving denim : Coexistence with aqua

写真13　森と海の詩

写真14　心の声をきく

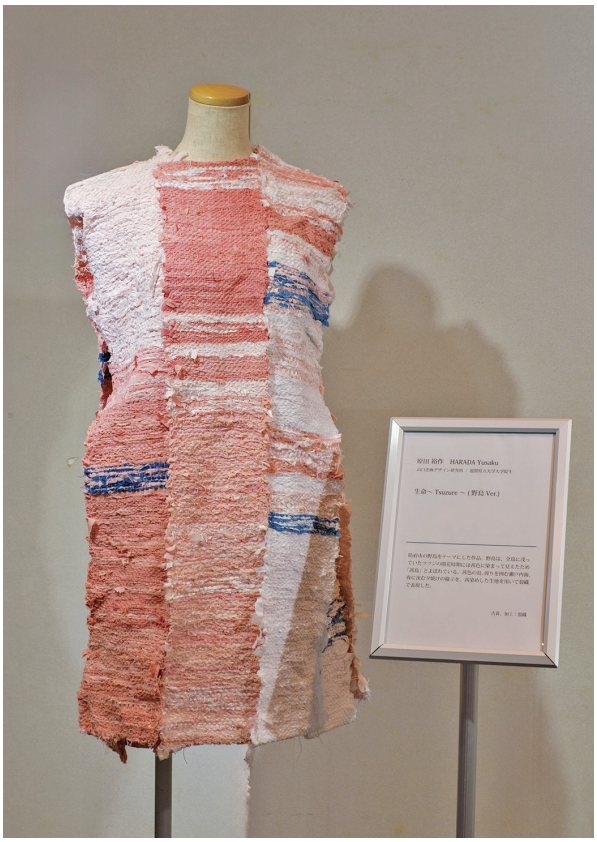


写真16　生命～ Tsuzure ～（ 野島 Ver.）

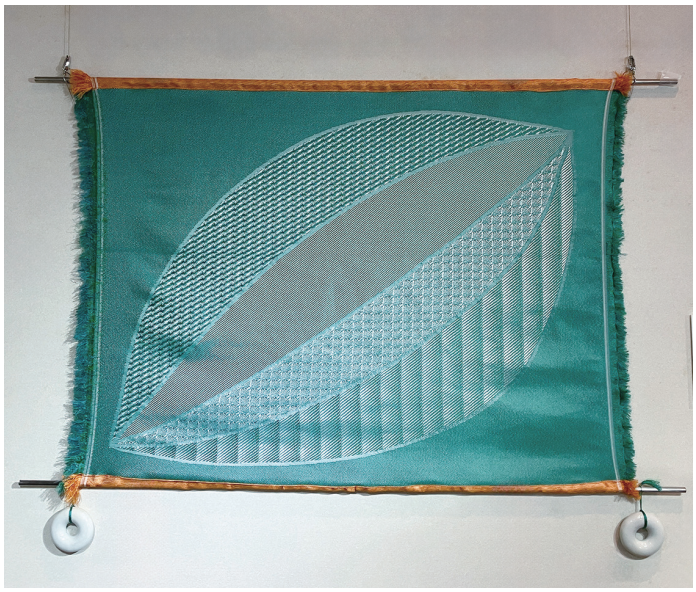


写真15　Leaf & Wave

写真17　ポッパナ織のラグ

「天、地、そして海」
木村 和枝（山口とくぢ和紙振興会結の香 会長）
　着られなくなった着物と手作業のみで作られる和紙でドレスと帽子を制作した。男性用長襦袢の前と後ろを逆にして染め和紙でアンダースカートを制作した。帽子は海のイメージ（写真10）。

「花のマーメイド」
おおうち あみ（手作り工房幸主宰）
　しっかりと撚りが掛かった細い部分と甘撚りの太い部分が交互に現れるスラブ糸を使用し、表情を出すために敢えてローゲージでシンプルな編地にした。透け感がさわやかなロングドレスの裾を、円型に形づけることによりシルエットを美しく見せる工夫をした（写真11）。

「Evolving denim :Coexistence with aqua」
武永 佳奈（倉敷市立短期大学 専任講師）
　光沢のある薄地のキュプラデニムを使用し、デニム生産と関連深い水の流れをイメージし、デザインした。水を70％削減したナノミスト加工を施した、環境にも優しい新感覚のデニムドレス（写真12）。

「森と海の詩」
小田 玲子（周南公立大学非常勤講師）
　森と海の密接な関係を蚊帳と藍布で表現しました。緑の蚊帳は実家にあった古い物。水色の方は自分で染めた物です。水の流れを表した藍布は森の流した涙のようにも見えます。森と海の保全を願いながら制作しました（写真13）。

「心の声をきく」
山本 成美（デザイナー）
　Well（良く）Being（在る）とは。社会的・経済的な安心の中に身があれども、幸福感を得られないことがある。最も重要で向き合うべきは自分自身の感情であり、自分が何に幸せを感じ生きているのか、考える。そうして行動をして初めて私たちは良い状態で在れるのだと思う（写真14）。

「Leaf & Wave」
甲斐 少夜子（アーティスト）
　森に生まれる木の葉一枚。大地に含まれる水は脈々と木に吸い上げられ、深い緑の葉の中へ。土中の水分は川へそして海へと流れ、太陽の光を浴びてエメラルドグリーンに輝く。葉脈の中に生まれる波と共に、母なる大地と父なる太陽に照らされている世界を表現している（写真15）。

「生命～ Tsuzure ～（ 野島 Ver.）」
原田 裕作（滋賀県立大学大学院、山口企画デザイン研究所）
　防府市の野島をテーマにした作品。野島は、全島に茂っていたツツジの開花時期には茜色に染まって見えたため「茜島」とよばれている。茜色の島、周りを囲む瀬戸内海、夜に沈む夕焼けの様子を、茜染めした生地を用いて裂織で表現した（写真16）。

「ポッパナ織のラグ」
タイトラッピ（工芸品店　ロヴァニエミ市　水谷由美子所蔵）
　日本の裂織と同じ文化がフィンランドにありポッパナ織と言われている。現在、山口市と観光パートナーシップ協定を結んでいるロバニエミに地域伝統工芸のアトリエ＆ショップのタイトラッピがある。ここではポッパナ織のワークショップがされている。このラグはここで製作され販売されていたもの（写真17）。フィンランドにはポッパナ織のファッションブランド、アンニッキ・カルヴィネンがある。

写真18　PEACE　裂織のビスチェとタイパンツ

写真19　帰森Ⅲ

写真20　渚

写真21　Kasanari

写真22　海と山の宝物

写真23　紺碧の薫風

写真24　躍るように暮らすエプロン

「PEACE　裂織のビスチェとタイパンツ」
水谷 由美子（山口県立大学名誉教授）
ビスチェは世界平和を祈る目的で、色彩を黄と青を基調に白で構成した。未使用のマスクを解いたガーゼをオーガニック玉葱の皮と藍の泥染めで染色した。その布や和紙を裂いて（切って）できた糸を緯糸にして織った裂織のタペストリーをビスチェとしてアップサイクルした。ボトムはファスナーを使わないタイパンツスタイルのデニムパンツである（写真18）。

「帰森Ⅲ」
故 淺田 陽子（初代Y-FATI所長、ニットアーティスト）
森に立つ巨樹をイメージしてデザインした。地底から湧き上がる様な力強さと、巨樹の持つ静けさを表現している。周防国分寺の秘宝「日光菩薩月光菩薩像」からもインスパイヤされた服飾造形作品。2012年8月 「国際服飾学術会議『Art - To - Wear Exhibition』」（於:台湾 高雄市 國立科学工藝博物館）にて発表（写真19）。

「渚」
下川 まつゑ（山口県立大学 実習助手、Y-FATI所長）
海と陸が交わる波打ち際をイメージした。波や風によって作られる砂紋の造形から着想を得て、布にピンタックを施し、立体的にデザインした。絶え間なく変化し続ける海と陸の曖昧な境界線を表現した作品である（写真20）。

「Kasanari」
原田 裕作（滋賀県立大学大学院、山口企画デザイン研究所）
布を幾層にも重ね、斜めに切り裂き、新たな布地を生み出す「スラッシュキルト」の技法を用いたワンピースとタペストリー。着物地をまばらに配置することによる、個性ある毛羽立ちや独特な配色を優美に表現することを目指した（写真21）。

「海と山の宝物」
大田　舞（MAIOHTA DESIGN / Designer）
やまぐち×ロヴァニエミデザインウィーク2021のメインビジュアル用にデザインした柄を、深い海と生い茂る山を連想させる配色で新たに「リデザイン」した。１つのデザインから新しい創造性を生み出す挑戦である（写真22）。

「紺碧の薫風」
田村 奈美（有限会社ナルナセバ代表、早鞆高等学校非常勤講師、中村女子高等学校非常勤講師）
初夏の頃、青空の中に緑が際立つ新緑の季節に森から海へと吹く心地よい風、薫風をイメージしたデザインを自身で育てた藍による藍染めで表現した。新緑の緑は玉ねぎ染めで黄色に染め、そこに藍染を重ねている（写真23）。

「躍るように暮らすエプロン」
田村 真子（murmur代表）
日々の暮らしは手仕事によって生まれている。単調にも感じる日々のリズムの中でいつも「心を躍らせて」いたい。そんな思いを踊った作品（コンテンポラリーダンス）の衣装として着用したエプロン。※2023年9月公演（写真24）

写真25　和風籠と小物入れ

写真26　WELLBA

写真27　The Blue－Green Connectio

「和風籠と小物入れ」
松永 美代子（東亜大学　非常勤講師）

祖母の着ていた古い写真を見て、今は亡き祖母の着物姿を偲んでいる中で思いつき、祖母の古着（大島紬）と和紙を融合させた竹籠と頂いた古い絣や端切れを使ってハナミズキの花を表現した小物入れである（写真25）。

「WELLBA」
荒木 麻耶（京都女子大学大学院、山口企画デザイン研究所）

京都市にてバックの企画・製造を行う株式会社シカタと共同研究し、人間工学の視点から肩への負担を軽減させ、軽く感じさせるリュックを開発。快適な着用感とライフスタイルに寄り添ったデザインを追求した（写真26）。

「The Blue－Green Connection」
水谷 由美子（山口県立大学名誉教授）

今回は「海と陸とウェルビーイング」の司会者の衣装をデザインした。海と陸の融合をイメージした手書きのグラフィックを加工して、プリントしたオリジナルの布を使用した。服飾デザインは上半身にドレープを効果的に使い、下半身はフレアでエレガントなイメージを演出した（写真27）。
モデル：高松綾香　　制作：水谷由美子、下川まつゑ、田村真子　　グラフィック提供：津村実奈

写真28　参考事例（黒羽 志寿子（1999）『晩鐘 Evening Bell』）

3 手仕事から生まれる創作

（1）ストレートスラッシュキルトから着想を得た作品制作「kasanari」

1）ストレートスラッシュキルトについて

本作品はキルトの一種であるストレートスラッシュキルト技法を用いてワンピースとタペストリーを制作したものである。ストレートスラッシュキルトとは、「土台布の上に3枚の布地を重ねて、正バイアス方向に等間隔のミシンを平行にかけ、そのミシン目の間にスラッシュ（切り込み）を入れて起毛させた、ビロード状のキルト」(注5) である。これは土台布の上に重ねる布（以下、重ね布）の厚さ、素材、さらにミシンキルティングの幅などによりテキスタイルの印象が大きく変わるのが特徴である。この技法は世界的に新しいものではないが、日本では近年リメイクやアップサイクルの文脈で注目されることがある。最終製品としては小物やインテリア用品がほとんどであり、参考事例のように柄物のテキスタイルやカラーシーチングを工夫して使うことでイラストや写真のような表現も可能である (注6)（写真28）。また衣服にも使用事例はあるが、布地を重ねるという特性上、生地が厚く、重たくなるため用途が限られる。その中では、条件を変えて制作されたストレートスラッシュキルトに対して外観的評価を行い、ファッションアイテムへの適合性を確認した上で、衣服が制作された報告がある (注7)。

2）作品制作の実験

本制作についてはまず、薄い白色のシーチングと標準の厚さのシーチングを4枚重ね、それぞれ50cm×2mのサンプル生地を試作した。それらをワンピースの型紙で裁断し、実際にダーツ処理や裁断部分を端ミシンで処理できるかについて検証した（写真29）。最終的に毛羽立ちのボリューム感を踏まえ、本試作用のシーチングを決定し、それらと着物生地を用いてさらに試作を重ねた。以下は試作を踏まえた本試作の手順と概要である。①シーチング（黒色）を土台布とし、その上に2枚のシーチング（上から濃紺と農灰）を重ねた。一番上に不要となった4種類の着物生地を任意の形・大きさに裁断し、まばらに重ねた。②4層の布地を固定するために縦横と斜め方向にしつけをし、またまばらに配置した着物生地は布地用のスティックのりを用いてシーチングに固定した。③バイアス方向に1cm間隔でミシンキルティングをかけ、キルティング間を専用カッターで裁断した（写真30）。④タワシでこすりながら水洗いをし、毛羽たち状に仕上げた。以上が制作の流れである。

写真29　試作、シーチング（型紙・処理の方法を検証）

3）作品について

展示会に出展された作品はストレートスラッシュキルトによるワンピースとタペストリーの構成である。服飾デザインとしては、テキスタイルの特徴を活かすためにシンプルなワンピースとした。前面は中心で切り替え、スラッシュが中心で衝突するようにし、背面は型紙を輪で裁断し、一方方向のスラッシュとした。また右身頃は濃色系の着物生地を多く配置し、左身頃は白基調の着物生地を多く配置することで左右非対称の配色とした。タペストリーについては農緑の着物とブルーデニムを配置することで、展示会のテーマであ

写真30　ミシンキルティングの作業過程

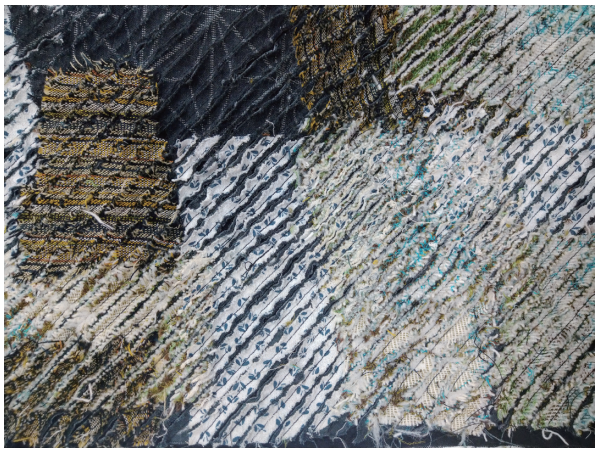


写真31　ストレートスラッシュキルトの細部

る海と陸をイメージした。デニムと着物生地、シーチングという異素材を組み合わせることで、イメージを個性的に体現することが可能であった。

一連の制作を通じ、感覚的に着物生地を配置していく中で筆者のイメージを自由にアウトプットすることを体験した。また切り裂く布地の種類により毛羽立ちの表情が大きく異なり、着物生地同士を部分的に重ねることで毛羽立ちにやや重量感が生まれ、独特な表現となることが確認できた（写真31）。（文責：原田裕作）

(2) ピンタックを用いた作品制作「渚」

1）ピンタックから生まれるデザイン

ピンタックとは、布を一定の間隔で細くつまんで縫った襞のことである。シャツやワンピースなどに取り入れられる装飾技法の一つである。ピンタックを施すことによって、布地に張りや立体感を出したり、襞が細かくなるほど繊細なイメージを表現したりすることができる。見た目はプリーツに似ているが、襞の端

写真32　参考事例（ISSEY MIYAKE　HaaT ピンタックシリーズ 2021）

を縫い止めることによって、プリーツの襞をより目立たせ、デザインやシルエットを保持する効果も生まれる。

インドの伝統的な手仕事の中には、布の織りや染め、プリントのほかに、手縫いによる刺繍やピンタックなどの縫製技術が現在も継承されている[注8]。これらの手仕事は、オートクチュールや、プレタポルテのコレクションでも取り入れられ、繊細な表現に貢献している。

DRIES VAN NOTENではインドの手仕事に魅了され、ブランドがスタートした当初から、インドの刺繍工場の職人にコレクション制作を依頼しながら、手仕事の素晴らしさを伝え続けている。これらの取り組みは、職人の生活を支えると同時に、インドの手仕事の技術継承につながっている[注9]。

日本では、ISSEY MIYAKEのブランドの一つである、HaaT（ハート）が、インドの工場と共同し、テキスタイルデザインに伝統的な技法を取り入れた衣服や小物を展開している。2021年にはピンタックシリーズとして、コットン生地にピンタックを不規則に施したスカートやシャツを発表した[注10]（写真32）。伝統的な技法を現代のライフスタイルに寄り添う形で落とし込んでおり、手仕事を活かした服作りの事例といえる。

写真33　脇布を広げた状態

２）制作作品について

本作品では、ピンタックの技法を用いて、直線的なパーツから立体的なワンピースを制作した。テーマである海と陸から発想し、海と陸が交わる波打ち際から着想を得た。波や風によって作られる砂紋の造形を、ピンタックで表現した。手仕事を取り入れた創作を試み、海と陸のつながりを表現する作品を目指した。

使用した素材は、古着の着物とデニムである。着物生地は解体し、一枚の布に戻した。反物の幅をそのまま活かし、デニム生地と組み合わせて、8枚の長方形のパーツから構成した貫頭衣のようなワンピースにデザインした。脇部分の布を広げると平面的な長方形になり（写真33）、着装すると布が垂れて立体的なシルエットになる。

着物生地やデニムにはピンタックを施した。生地と同系色の糸を使用し、約1cm～1.5cmの間隔で、襞の端から2mmのところをミシンで縫った。今回使用した着物生地には水紋のような模様があり、ピンタックを施した後の布と比較すると布のイメージが大きく変化することが分かった（写真34）。今回のピンタックは自然が持つ有機的な形を表現するため、印付けをあえて行わず、目分量で縫い進めた。縦方向にピンタックを入れた後、さらに横や、斜め方向にもつまみ、襞

写真34　ピンタックの有無の比較

写真35　ピンタックのディテール

の端を縫うことで、布自体に立体的な凹凸が表現できた（写真35）。ピンタックによって生まれる布の張りを生かし、長方形だけで構成したシンプルな形であるが、動きのあるシルエットを作り出すことができた。

ピンタックは細かい作業の繰り返しによって作られる。１本１本の襞を縫い留めていく作業は非常に地道で時間のかかる作業であったが、これらを積み重ねていくことで、布の質感や表情が変化し、次第に形になっていく過程は、筆者にとって創作意欲を掻き立てるものであった。

4　まとめ

「幸せは手仕事にやどる」展の開催を通じて、出展作品の紹介と、伝統的な手仕事を用いた作品について検証した。

今回の展覧会では、出展者18名、総勢22点の作品を

写真36　展覧会場風景

展示することができた。制作者がそれぞれ専門とする分野でテーマを捉え、作品の制作、展示に取り組んだ。ストレートスラッシュキルトやピンタックの縫製技法のほかに、パッチワーク、ニット、染色、ファイバーアート、裂織など多彩な手仕事を取り入れた作品が見られた。

展覧会自体は1日限りの開催で、尚且つ基調講演やシンポジウムと同時開催であったため、非常に限られた時間の中での展示鑑賞の環境にあったといえる。しかし、基調講演やシンポジウムの内容を踏まえた上で鑑賞すると、海や陸の自然環境への意識や、手仕事への関心が生まれ、テーマや作品の意図がより伝わりやすくなったのではないかと考えられる。当日は制作者本人が数名、展覧会場のスタッフとして案内を務めており、来場者の声を直接聞く機会があった。その中には、サステナブルなコンセプトを持った作品への共感の声も多かった。

ストレートスラッシュキルトやピンタックの技法については、それぞれの作品について考察していく中で、手を動かしながら自分の中で新しい表現や、手法を発見していくことの面白さを改めて確信している。

筆者はこの展覧会において、企画を担い、出展作品の取りまとめや、空間レイアウトのディレクションを行なった。自身の作品制作も行う中で、来場者の中に少しでも新鮮なアイデアや、創作の楽しさが感じられるようにと思い、進めてきた。

今後も創作活動を継続していくことで、ものづくりの喜びや楽しさを伝え、それが手仕事の技術継承にも繋がっていくことができるよう、取り組んでいきたい。

（Ⅲの１、２、３（２）、４、文責：下川まつゑ）

Ⅳ 手仕事の未来

アパレルの世界における最高の手仕事は、今もパリのオートクチュールに引き継がれている。それは数えられるほどの人のための服であり、多くの人はプレタポルテや量産服を着ている。業界ではマシンメイドという表現がある。ミシンを使うけれども、手仕事に近い技巧的な製造手法により、既製服に高い付加価値が付けられている。

今回、裂織の技法、ピンタック及びストレートスラッシュキルトなどの手仕事を生かした作品が「幸せは手仕事にやどる」展で展示された。伝統的な技法を現代的な感覚で今の服飾デザインに適応することで、手仕事が生み出す素材の面白さや美しさが示された。

デザインは一定の量産を前提とした行為であり、価格が同時代のコスト感のリアリティを伴っている必要がある。元々服飾の新しいデザイン提案は、コンセプトが重視され、実験的、アート的な作品が提示されて、それが日常的な服へと落とし込まれる性質がある。この落とし込みにおいて、手仕事的な要素と機械による量産化の融合が図られ、商品としての存在が可能になる。

山口における染織工芸は、地場産業との関係で発達し、その内容が変容されてきた。現在ではほとんどの地場産業としての染織は消滅している。一方で地域の文化・産業振興の立場から、各地域で伝統技術が復興されている。当初は行政の支援を受けながら、柳井縞は復興が始まり、現在は有志による活動を行っている。徳地手漉き和紙や富海の伝統的な天然灰汁発酵建ての藍の染色技法は、任期を終えて地域に残った地域おこし協力隊によって継承されている。これらの手仕事だけで生業を立てることは難しく、農業やその他の副業

がされている。

復興及び継承を担っている若者の行為は、新たにインバウンド観光におけるデスティネーションとしての可能性がある。最近では地域に偏在する本物の文化へ世界の関心が向けられている。襤褸の展覧会が、世界中を巡回している例もある。2章で例示したコシキリのように、手直しをしながら長年使われた衣服や布には独特の味が生まれる。世界では日本の伝統的な手工芸や経年変化したものが生み出す美しさに高い評価が与えられ、それがアパレルにおいてデザイン上にその美意識の再現として活用されてもいる。

筆者は、研究室の仲間とともに伝統的な縞の織物やプリントのテキスタイルを用いて労働着であるmompekkoの商品開発を７年間行ってきた。そこでは手織りの柳井縞と機械織のやまぐち縞を用いた作品を発表し、やまぐち縞は商品として販売実験も行った。とはいえ、糸からオリジナルなものを染織し、個性的な織をしているので、やはりSPA（製造小売業）のような量産品のコストを実現することはできない。

手仕事としての伝統技術はワークショップ形式で行うことで、多くの人が知る機会を得ることができる。そこで触発されて仕事にする人もいる。防府市の蛸壺を製造していた窯元が、担い手の高齢化のために行ったワークショップで継承者が現れた。また、日常的な活動として動機づけられて裂織を楽しむ人も現れた。

今後、手仕事への触発そして継承への動機づけにワークショップは有効な手段だと考える。こうして持続可能な地域固有の伝統的手仕事は、地域の人々の間でその存在が認識され、継承される可能性がある。そこでは現代生活との融合が図られるデザインがされることで、新たに人々の関心を喚起できるのではないかと考える。

謝辞

上記の研究について、ブルー＆グリーンアートプロジェクト実行委員会 安倍昭恵会長をはじめ、筆頭理事として運営にかかわっていただいた柳居俊学山口県議会議長、その他多くの皆様にご協力、ご指導を賜りました。心からお礼を申し上げます。また、資料提供をしていただいた萩博物館、及び日原歴史民俗資料館、及び付録Ⅱを含め、英語整文の校正をしたシドニー・マイケル山口県国際交流員にお礼を申し上げます。

最後に「幸せは手仕事にやどる」展に参加下さった陶芸作家、大和保男氏、15代 坂倉新兵衛氏、坂倉正紘氏および山口ファッション＆テキスタイル研究所Y-FATIと山口企画デザイン研究所の皆様にお礼を申し上げます。

注

1　柳 宗悦『手仕事の日本』岩波書店、2006年、11-12頁。昭和18年（1943年）に完成され、昭和21年（1946年）に出版。

2　先掲書、164-166頁。

3　松尾 優平「山口県における裂織・紙布の分布図」『萩博物館調査研究報告』第18号、2022年、５頁。

4　水谷由美子・山本成美・原田裕作「ブルー＆グリーンアートプロジェクト2022と地域文化創造の実践的研究～サステナブルデザインと『海を巡るファッションの旅　Step By Step』を事例として」『山口県立大学学術情報』第16号国際文化学部紀要通巻第20号、山口県立大学、2023年、180-192頁参照。

5　黒羽 志寿子『黒羽 志寿子のキルトテクニック ストレートスラッシュキルトの世界』 文化出版局、1999年、37頁。

6　黒羽 志寿子《晩鐘 Evening Bell》1999、140cmx77cm、庄内刺し子、藍印半纏、藍無地、シーチング。

7　田中百子・角田千枝「ストレートスラッシュキルトの表情」『相模女子大学紀要』、B 自然69巻、2006年、83-89頁。

8　鳥丸貞恵、鳥丸知子、和田良子「布に踊る人の手」、西日本新聞社、2004年。

9　WIRED JAPAN 「持続し続ける、つくり手との関係性：METHOD #11 DRIES VAN NOTEN」https://wired.jp/2020/06/06/wired-vol36-method-11/（2024/2/3取得）

10　FASHION PRESS「HaaTの新作、軽やか“ピンタック”コットンブラウス＆“深黒”カラーの格子柄ボトム」 https://www.fashion-press.net/news/76388（2024/1/3取得）

写真撮影者あるいは出典

1　萩博物館所蔵
2　a.b.c水谷由美子
3　柳井縞とは「柳井縞の会」http://yanaijima.web.fc2.com/yanaijimatoha.html
4　アグリアート・フェスティバル実行委員会
5　水谷由美子
6-27　貝崎 健
28　作品集一覧「キルト作家SHIZUKO KUROHA」https://quilt-kuroha.com/works/%e6%99%a9%e9%90%98/（2023/12/28取得）
29-31　原田裕作
32　FASHION PRESS「HaaTの新作、軽やか“ピンタック”コットンブラウス＆“深黒”カラーの格子柄ボトム」 https://www.fashion-press.net/news/76388（2024/1/3取得）
33-35　下川まつゑ
36　貝崎 健

付録Ⅰ

「ブルー＆グリーンアートプロジェクトBGAP 2023～海と陸とウェルビーイング　幸せは手仕事にやどる～」におけるシンポジウム等の記録

項目：基調講演　展覧会オープニング　事例紹介　パネルディスカッション

■ 基調講演

○司会（高松綾香）　まず、ここでデイヴィッド・ロックフェラー・ジュニア様の御講演となります。デイヴィッド・ロックフェラー・ジュニア様は、ロックフェラー家第５代当主としてロックフェラー兄弟基金評議会、ロックフェラー・アンド・カンパニー取締役などロックフェラー家の要職を歴任されております。

本日は、2004年に設立された非営利団体のセイラーズフォーザシーをはじめ、数々の環境に対する取組の御紹介を頂きます。通訳は千葉様です。

それでは、デイヴィッド・ロックフェラー・ジュニア様、よろしくお願いいたします。（拍手）

（写真1）

写真1　左からスーザン・ロックフェラー、千葉宗一郎、デイヴィッド・ロックフェラー Jr.

David: Dear distinguished guests,

Thank you for inviting Susan and I to be a part of the Blue & Green Project. This event presents a wonderful opportunity to highlight the critical work of both Blue and Green initiatives (both land and sea), and to ensure a brighter future for generations to come.

First and foremost, I would like to extend my heartfelt thanks to Akie Abe for her unwavering support of our initiatives over the years.

Our friendship and collaboration have grown significantly since our first meeting back in 2012 when Minako invited her to our annual gala. And then in 2015, at the parliamentary office, Susan and Akie spearheaded a symposium focused on the sustainability of food.

While Akie discussed agriculture, Susan shed light on the oceans. The following year, Akie played a pivotal role in hosting the "Japan-U.S. International Ocean Environment Symposium" in Hawaii, with the intent to amplify environmental consciousness in both nations.

I must also commend Akie for her role in orchestrating the Spouses' Program for the G20 leaders in New York in 2019 and for hosting the Pacific Islands Leaders Meeting in Fukushima Prefecture in 2020. Both occasions significantly heightened global awareness about the imperative of ocean preservation. Thank you again, Akie, for letting Sailors for the Sea Japan coordinate those events for you.

As we mark the 13th year of celebrating Sailors for the Sea Japan (I actually founded the U.S. version in 2004) I'm reminded of the deep personal connections that underpin this mission. Seventeen years ago, Susan and I had the pleasure of meeting Minako Iue at a Japanese tea ceremony at Rockefeller Center in New York City. Our personal bond has since flourished, not just as friends with a shared vision for the ocean, but through countless adventures exploring art, nature, and culture along the Japanese coastlines.

In fact, we are now creating a map to show all the places we have visited together, and I am proud that Susan and I have seen parts of Japan very little visited by Westerners. Minako has generously shared her time with us, deepening our appreciation for this beautiful country including, especially, Yamaguchi Prefecture.

An abundant ocean has the potential to provide over one billion people with a nutritious seafood meal every day. And this bounty can be harvested in a way that benefits our climate and promotes biodiversity. Many might not realize that seafood is one of the few remaining wild protein sources, and - when managed responsibly - it can sustain us indefinitely.

It's for this reason that we continue to advocate for the Blue Seafood Guide, which today boasts 68 partners, 14 of which joined us just this year. We also have supported the passage of two fishery laws in Japan, which will help to ensure that your oceans are managed sustainably for future generations.

I'm particularly proud that, in 2020, the second fisheries law was passed, which was at least partially implemented in 2022. This law promotes transparency, providing the public insight into three critical areas: the type of fish being caught, the quantity harvested from the oceans, and the method used in its capture. Shockingly to me, 40% of seafood labels globally are inaccurate. Therefore, transparency is crucial.

We must ensure that our seafood consumption is sustainable, does not deplete other species, and does not inadvertently harm other marine life. While this law is an improvement, it only covers seven species. But we still have approximately 300 indigenous species left to cover.

Sailors for the Sea Japan, in conjunction with Oceana, is championing this cause, providing consumers with the knowledge to make informed and responsible choices about the seafood they consume. This mission has vital implications, not just for sustainability of fisheries, but for the benefit of our own health.

Mislabeled fish can pose serious health risks, especially to children and women of childbearing age. In our commitment to passing on a legacy to oncoming generations, which I understand to be a central goal of the Blue & Green Project, we have hosted events and forged partnerships with youth organizations. These collaborations aim to heighten awareness about ocean preservation and to share our expertise, ensuring we leave a planet that future generations can thrive in.

In conclusion, our vision is for Sailors for the Sea Japan, powered by Oceana, to collaborate with diverse organizations (like hotels, restaurants, and municipalities), to ensure transparency and adherence to international regulations. With the concerted efforts of brilliant scientists and institutions associated with Sailors for the Sea Japan, I am confident we can preserve our oceans and continue to feed the world.

So, I'd like to extend my heartfelt gratitude to everyone here for supporting this noble cause, ensuring the health and abundance of our oceans for generations to come. Thank you very much, and, after Susan and Minako have spoken, we would be happy to receive your questions.

Thank you.

○デイヴィッド・ロックフェラー・ジュニア　御来賓の皆様、本日は私そして妻のスーザンをこのような機会にお招きいただき、誠にありがとうございます。ブルー＆グリーンアートプロジェクトは、ブルーとグリーン、陸と海双方の取組の重要性を強調し、未来の世代に輝かしい地球を残していく大変重要な取組だと思っております。

まず、安倍昭恵元内閣総理大臣夫人に対し、心より感謝申し上げたいと思います。今まで様々なプロジェクト、セイラーズフォーザシーの取組をサポートいただきました。心より感謝申し上げます。

まず、私たちの友情は、2012年にセイラーズフォーザシーの年次総会において井植美奈子理事長が私を安倍昭恵内閣総理大臣夫人(当時)と引き合わせてくださったことに始まります。それ以来、様々な取組を共に推進してまいりました。まず、2015年に衆議院会館において昭恵様は食品の持続可能性についてシンポジウムを開催されました。

昭恵夫人はそのときに農業について御講演をされましたし、スーザンはそのときに海洋環境について講演をしました。その翌年、安倍昭恵様は環境問題について日米両国での意識を高めるために、ハワイにおいて日米国際海洋環境シンポジウムを開催されました。

さらに、昭恵様は2019年にニューヨークでＧ20首脳会議の配偶者プログラムを開催し、そして2020年には福島県にて太平洋諸国首脳が集まる会議に関しても大変重要な役割を果たされました。その双方の集会において環境保護の必要性を世界に訴え、その取組は全世界の首脳のみならず、多くの方々の環境に対する意識の向上に大変寄与されました。この場をお借りして、セイラーズフォーザシーの取組をサポートして頂いたことを御礼申し上げます。

セイラーズフォーザシーは私が2004年に創設させていただいたのですが、今年で13周年になります。思い返すと、17年前、スーザンと私はニューヨークのロックフェラーセンターにおいて美奈子様とお会いさせて

いただきました。その後私たちの友情は花開き、海洋保全に関する同志ということだけではなく、文化、アート、芸術、様々な分野において様々な冒険をさせていただきました。そして、一緒に今日本の海洋環境に対し、共に取り組む大変重要な仲間として活動しております。

私たちは、今共に訪れた日本の場所の地図を作成しております。スーザンと私は、美奈子様のおかげにより日本で特に外国人があまり訪れたことのないような場所を多く訪問させていただきました。その一つは、この大変美しい山口県でございます。

豊かな海洋、これは毎日数十億人の貧困で苦しむ方々を救う、そのようなポテンシャルを秘めております。そして、この富は気候に利益をもたらすだけでなく、私たちの健康に対し、多大なる貢献をするというふうに感じております。また、多くの方々は気づいていないかもしれませんが、海洋生物、海洋品、水産品ですね。これは最後の自然のたんぱく源の一つでありまして、責任を持って運用すれば私たちに無限の可能性を提供してくれるものと思っております。

このため、私たちはブルーシーフードガイド、後ほど井植理事長から説明があると思いますが、このブルーシーフードガイドを大変サポートしております。今年に関して、14のパートナーが加盟をしまして、合計で68のパートナー、企業様、自治体、政府がこのブルーシーフードガイドに加わっております。さらに、日本で２つの漁協法の施行に私たちは大変なサポートをさせていただきました。

私が特に誇らしいと思っているのは、2020年に歴代で２回目の漁業法が制定され、2022年にこれが施行されたことでございます。この法律は、特に透明性、トランスペアレンシーを大変重要視しております。これには、３つのポイントがございます。１つ目に関してはどのような魚を捕っているのか、２つ目に関してはどれくらいの量を捕っているのか、そして３つ目に関してはどのような方法で捕られているのか。この３つの透明性を高めるための法律であります。しかしながら、衝撃的なのは日本の40％の表示が正しくない、不正確なものでございまして、透明性を今後推進していくことが大変重要だと思っております。

海産物の消費に関しては持続可能性というのが大変重要でありまして、種を減少させず、ほかの海洋生物への影響を最小限にとどめておくことが大変重要です。先ほど申し上げた法律、これはまだ、大変な進歩ではあるのですけれども、現在先ほどの３つのレギュレーションは７種類の魚にしか適用されておりません。実は、あと300種類の魚をカバーする必要がございます。

したがいまして、セイラーズフォーザシー、そして後ほど説明させていただきます海洋保全団体のオセアナOceana、この２つの団体は透明性を高めるために連携をし、消費者に責任のある選択を促すための取組をサポートしてまいります。責任ある消費、この使命に関しては漁業者の持続可能性だけでなく、私たち一人一人の健康において大変、重要な意味を持っております。

誤表示をされた魚、水産品に関しては、特に子供たちや出産可能な年齢の女性にとって深刻な健康リスクを引き起こす可能性がございます。私たちは、次世代にこのすばらしい地球を受け継ぐという決意の下、ブルー＆グリーンアートプロジェクトの中核的な目標であります若者のサポート、これに大変な共感をしております。この海洋保全に関する様々な意識を向上させていくために、いろいろな青少年の、いわゆる若者の団体との提携をさせていただきました。この私たちの持つ知見を共有し、次世代へ美しい地球を残していくこの取組に関して努力を続けてまいりたいと思っております。

最後に、私たちのビジョンは、オセアナの支援を受けてセイラーズフォーザシーがホテル、レストラン、自治体、様々な組織と協力しまして国際規制のルール作り、そして先ほど申し上げた透明性の遵守、この２つを推進していくことでございます。セイラーズフォーザシージャパンと提携します大変優れた科学者、そして学術機関の皆様の協力を得て私たちは海洋環境を保護し、世界に安定的な食料の供給を続けることができると確信をしております。

ここにいらっしゃる皆様に心からの感謝の意を表したいと思います。将来の世代のために、海洋の健康と豊かさを確保するこの使命を持ち、今後も活動を続けてまいりたいと思います。この後、スーザンと井植理事長からお話があると思いますが、その後皆様より質問をお待ちしております。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会　デイヴィッド・ロックフェラー・ジュニア様、ありがとうございました。

それでは、続きましてスーザン・ロックフェラー様に御講演いただきます。

スーザン・ロックフェラー様は、ドキュメンタリー映画制作者として環境問題や発展途上国の医療、音楽療法などの問題を提唱するほか、幾つもの環境保護団

体の理事を務めておられるなど広く御活躍されています。

では、まず初めにスーザン・ロックフェラー様の代表作品であります映画「Mission of Mermaids:a love letter to the ocean」を御覧いただきます。皆様どうぞ前方のスクリーンを御覧ください。

〔映像視聴〕

Mission of Mermaids: a love letter to the ocean「Vimeo」https://vimeo.com/41292809でご覧いただけます（写真2）。

写真2　映画「Mission of Mermaids」上映シーン

○**司会**（拍手）ただいまの映像を振り返りながら、御自身の活動についてスーザン・ロックフェラー様に御紹介いただきたいと思います。

では、スーザン・ロックフェラー様、お願い致します。

Susan: Good morning, everybody. Good morning to all the mermaids and mermen that are in the audience, thank you so much for being here this morning and inviting us to participate in the Blue & Green Project. One thing to mention is that I made that film over a decade ago and I decided to make that film because I wanted people to connect to the mermaid, to the myth. People believe in angels, they believe in mermaids, and I wanted to find a way to connect science with the heart and get people involved in ocean conservation.

So, as David and I reflect on where to find solutions to many of the problems facing our world, we personally believe Japan holds many of the answers. Not just in its harmonious and right-sized ecological design, but in its profound appreciation of beauty.

As David shared, we've had the pleasure of engaging in numerous activities centered on sustainability. In 2015, Akie and I co-hosted a symposium called "Food for Thought." We discovered that we share so many common passions. While Akie is involved in cultivating rice here in Yamaguchi, I have the privilege of serving on the board of Stone Barns, a Rockefeller family farm initiative where we practice organic and sustainable agriculture.

The world-renowned chef, Dan Barber, has a restaurant called Blue Hill that's housed on the Stone Barns property in New York. And Dan Barber, who is also in the film talking about agriculture, looks for what is best for the health of the soil, he and his company, Row 7 Seed Company, work with seed breeders, and then create delicious meals that both educate and emphasize flavor and nutrition.

Our recent visit to Tokyo just a few days ago focused on ocean issues and artistic endeavors with the Premium Imperiale. It solidified our belief that, through the power of science, creativity, and responsible innovation, we can find solutions and opportunities for a robust Blue and Green economy.

In agriculture, we can find solutions by understanding that if what is put in the soil (like chemicals and fertilizers) is in excess, it can put our soils, our oceans, and human health at risk.

Oceana and Sailors for the Sea Japan is finding solutions to keeping our oceans bountiful with tools like the Blue Seafood Guide and working to accelerate laws that create better transparency and labeling of seafood.

Japan, as we all know, is an island nation, and a land of deep beauty and wisdom. Its gardens, shrines, crafts, and design all resonate with a deep appreciation of nature. This beauty, paired with initiatives like Kyoto University's upcycling project of turning old kimonos into exquisite dresses, or beautiful packaging made from natural materials instead of single use plastics, shows that Japan can lead in both tradition, sustainable innovation, and exceptional craftsmanship.

David and I have the honor of being board

members of Asian Cultural Council, an organization that advances cultural exchange, international dialogue, and mutual understanding between the U.S. and Asia through 6,000 fellowships and grants to artists, scholars, and arts professionals to date, and is still growing strong. David’s uncle, John D. Rockefeller III, founded the ACC in 1963 to embody his belief that alongside international political and economic relations, creative and artistic expressions are integral to recognizing our common humanity.

In the midst of so much ongoing global unrest, I believe we can all benefit from taking time to mentor next generation leaders, share our knowledge, and collaborate across borders. I share my passion for ideas and responsible innovation through my digital magazine, called “Musings,” and by mentoring next generation entrepreneurs, and using my talents in filmmaking, painting, and design to carry messages of hope and love for our planet.

Here in Japan, I am inspired with hope from those working to rejuvenate organic farming practices, to protecting our precious oceans, to finding ways to reduce plastic pollution, and to the creative and flourishing art scene that opens people’s hearts and minds. We all want love, peace, and health for our families and our common future and our choices, both big and small, shape that future and can make a global impact.

So, when reflecting on our work in agriculture and ocean health, it dawned on me that gathering our food from land and sea and feeding ourselves nourishment is even older than architecture, which offered protection from elements of cold, rain, and hot summer heat. This makes the practice of cooking and nourishment mankind’s oldest art form; like all other artistic disciplines, cooking expresses a civilization’s world view.

What better way to get to know people and its culture than to cook and eat together? Whether it is a puffer fish dinner that we experienced a few days ago, or yesterday where we had a barbecue by the sea and met organic farmers, salt producers, and hog farmers, or Akie’s rice noodles, or David and my honey from our honeybees and apple sauce from the apple trees in our farm— my hope is that we can continue to keep our lands and seas healthy to celebrate the diversity of protein, food, and medicinal plants and resources that come from our land and oceans.

As my 89-year-old mother says, with all the hardships and pain in this world we must make sure to celebrate everything we can. David and I feel very blessed to be here and appreciate you all coming here this morning. Many thanks to Akie for our deepening and beautiful friendship. Thank you, Minako, for our deep and treasured friendship. We can all do so much if we work together, if we share best practices and build a Green and Blue economy together. Conferences like these are one way to build this collaboration and discover solutions together.

Thank you so much.

○スーザン・ロックフェラー　皆さん、おはようございます。本日は、お招きくださいまして誠にありがとうございます。そして、会場のマーメイドの皆様、そしてマーメンの皆様、本日はお越しくださいましてありがとうございます。

今御覧いただいた映画は私が10年前に作成した映画でございまして、実は科学、これとハートをつなぐ、そのような思いで作成をさせていただいた海洋保全に関する映画でございます。また、ストーリーを話すことの重要性を私は大変重要視しておりまして、皆様にできるだけ興味を持っていただく形で発信をしていきたい、そのような思いで作成をさせていただきました。

デイヴィッドと私はよくディスカッションするのですが、私は日本が世界に関する問題の解決策を握っていると、とりわけ海洋保全に関する解決策も握っていると思います。それは、日本の和を尊ぶ心や最適化された生態系ということだけではなく、美しさに対する尊敬の念、美しさに対する日本人の感謝の念、これがすばらしく世界に対して提示できる、また世界の諸問題を解決する上でのヒントになっていると思っています。

デイヴィッドが先ほど共有させていただきましたように、私たちは持続可能な海洋資源に関する様々な活動を行ってまいりました。2015年には、私は昭恵夫人と食について考えるシンポジウムを開催させていただきました。そこで、私たちは多くの共通の価値観を有していることを改めて実感させていただきました。昭

恵さんは山口でお米を栽培しておられますが、私はロックフェラーファミリーのファームでありますロックフェラーファーム、ストーンバーンズという方が理事を務めているのですが、そこでオーガニックな農産品、これを栽培しております。

世界的な有名なシェフでありますダン・バーバラという方がいらっしゃるのですが、彼のレストランであるブルー・ヒルはニューヨークのストーンバーンズという所の敷地にございます。ダンは土壌の健康に最適なものを探しまして、彼らの会社、ローセブンシーズという会社は、種子の育成者と協力をしまして、様々な味や栄養を強調する、栄養が豊かなおいしい食事作りに励んでおります。

今回の私たちの東京の訪問は、テーマが２つございます。１つ目に関しては海洋保全、２つ目に関してはアート・芸術についての旅でございました。この旅を通じ、私が学ばせていただいたことは、科学そして芸術、創造性、また責任のあるイノベーションの力、これらを通じてブルーとグリーンの経済を活性化させ、世界の諸問題を解決することができるということを改めて実感させていただきました。

まず、農業においては土壌に入れるもの、化学物質や化学調味料、肥料などのあまりにも過剰なものがインプットされた場合、土壌、海洋そして人間の健康に多大なる被害、危険を及ぼすということを私たち一人一人が理解すること、これがまず解決において重要だと思っています。

オセアナとセイラーズフォーザシージャパンは、先ほどもちょっと触れさせていただきましたブルーシーフードガイド、このツールを使いまして、デイヴィッドが先ほど申し上げさせていただきました透明性、そして適切なラベリング、この２つの浸透を図り、海洋の豊かさを保全してまいりたいと、維持してまいりたいと思います。

日本は皆様御存じのとおり島国でありますが、自然の豊かな知恵の国であります。その神社や工芸品、またデザイン、そして自然に対する深い感謝と尊敬の念に大変共感をしております。この美しさは、例えば京都大学において古着を新しいドレスにリサイクルする、アップサイクルをするプロジェクトがございますが、１回きりの例えばプラスチックの使用だけではなく、自然素材から様々なものを作ることができる取組として私は大変評価をしております。日本の持つ伝統、そしてこのようなすばらしい職人技、これが持続可能なイノベーション、ひいては海洋保全や地球環境に優しい様々な製品を作り出していけると私は確信をしております。

デイヴィッドと私は、ＡＣＣ、アジアン・カルチュラル・カウンシル、いわゆるアジア文化協会の理事を務めております。この組織は、アーティストや学者、芸術関係者に対する助成金やフェローシップを通じてアメリカとアジアの文化交流の促進を図っております。そのメンバーとしては、今まで6,000人の方々に助成金やフェローシップを提供させていただきました。また、デイヴィッドの叔父でありますジョン・Ｄ・ロックフェラー３世は1963年にこのＡＣＣを創設いたしまして、国際政治、経済と並んで文化芸術の重要性を説いた人物であります。創造的な芸術の表現が、いわゆる人類の共通の資産であると、その世界平和にとって大変重要な役割を持っているのだと、そのような信念を体現するためにこのＡＣＣを創設いたしました。

今、世界情勢は大変不安定な状況でございますが、私は次世代のリーダーを指導し、そして私たちの持つ知見を共有することで、国境を越えて協力する時間を持つことができると、そして、この共通の時間をなるべく長く持つことが私たちの人類社会全体において大きな利益をもたらすと確信をしております。私は、私のデジタルマガジン、ミュージングというものがあるのですけれども、ミュージングを通じて私のアイデアやイノベーションへの情熱を皆様に発信し、そして次世代の教育、芸術家や起業家の育成に励んでおります。

私は、日本で有機農業の実践を通じ、貴重な海洋保全を保護する様々な起業家にお会いさせていただきました。また、人々の心を震わすすばらしいアートにも触れさせていただきました。それらに対して、私は大変な希望を持っております。私たちは、誰もが共通の家族への愛や友人への愛を、そして平和と健康を望んでいます。私たち一人一人の選択肢が、その選択肢が大きなものであったとしても小さなものであったとしても、今後の未来を形作り、美しい地球を残していくことができると確信しております。

私たちの農業や海洋の取組を振り返りますと、私たちが陸や海から食べ物を集め、自分に栄養を与えるという行為は、寒さや暑さから自身を保護する建築の分野よりもはるか昔から行ってきた人類の営みであるということが思い出されます。これにより、やはり料理と栄養の実践というのは人類最古の芸術形態であると思っております。ほかの全ての芸術の分野と同じように、料理というのは世界の文明の、その国の文明の世界観を表現するものだと思っています。

その国の文化を知るために、一緒に料理をして過ごす以上の最適な手段はございません。例えば、私は昭恵夫人と井植さんと数日前にフグのディナーを楽しませていただいたのですが、そのようなディナーも日本の文化を知る絶好の機会となりました。また、昨日海辺でバーベキューを楽しませていただきました。その際に、有機農家の方、塩の生産者の方、また養豚場にも赴くことができまして、そして昭恵さんの作るライスヌードル、また私たちが自分たちの農場から作る蜂蜜やリンゴのソース、こういう様々なものに私は希望を見出しております。私たちが土地と海を健全に保ち、たんぱく質、食品、薬草、そして資源の多様性を維持していくことを心より願っております。

私には89歳の母がいるのですが、この世界は様々な課題や困難にあふれていると。そんな中では、常に前向きでいることが大切であります。食事をすることでぜひ日々に感謝をし、前向きに生きてまいりましょう。デイヴィッドと私は、本日ここにいることを大変光栄に思っております。また、昭恵さん、井植さん、このような機会を提供いただきまして誠にありがとうございます。私たちは皆さんが個々の持っているベストプラクティスを共有し、未来の世代につなげることで、美しい緑と青の、ブルーとグリーンの経済を作ることができると確信しております。その上で、本日のような会議は知見を共有する上で大変重要な役割を担っていると確信をしております。どうか皆様、今後ともブルー、グリーン、双方の分野において共に活動いただき、美しい地球を次世代に残してまいりましょう。本日は、御清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会　スーザン・ロックフェラー様、ありがとうございました。

続きまして、一般社団法人セイラーズフォーザシー日本支局理事長を務めておられます井植美奈子様より、御自身の活動を御紹介いただきます。

では、井植様、お願いいたします。

写真3　左から安倍昭恵、井植美奈子

○井植美奈子　ありがとうございます（写真3）。

皆様、おはようございます。井植美奈子です。よろしくお願いいたします。今日はお招きありがとうございました。

本日は、もう先ほどデイヴィッドとスーザンからいろいろなお話があったと思いますが、おさらいしながら、では海洋環境についてみんなで何ができるのかを考えていけたらいいなと思います。どうぞ、しばしお付き合いください。

私たち、セイラーズフォーザシー、Affiliated With Ocean, Powered by Oceanaなんですけれども、３つのプログラムを主に持って活動しています。１つ目に海洋汚染の削減のためのクリーンレガッタ、２つ目に水産物の持続可能な消費のためのブルーシーフードガイド、そして子供たちの海洋教育プログラムのためのケルプ、このようなプログラムがございます。

皆さん御存じと思いますが、SDGs、その中で、14番が海を守ろうというところなのですが、これ日本のSDGsの成績表なのですが、赤点がついています。残念ですけれども、ここが頑張りどころだと思います。

世界中の海の問題を大きく３つに分けて考えてみましょう。１つ目には、公害、プラスチック公害、汚染水、そして石油の流出ですとか、放射線とか様々な問題がありますね。２つ目に、気候変動です。海洋環境が悪くなっていて、海水温が上昇しています。そして、気温が上がってきて海面上昇という問題も起きてきています。それから、CO_2をたくさん、二酸化炭素を海がたくさん吸収しますから、酸性化という問題も起こっています。そして、３つ目が乱獲です。水産資源は無限ではありません。取り過ぎてしまうと枯渇してしまいます。今日は、この乱獲について少し詳しく見てみましょう。

実は、先ほどから申し上げているように、セイラーズフォーザシーの活動にもブルー＆グリーンの活動にも、ずっと昭恵さんから多大な御尽力を頂いてきています。私ども2011年からずっと年次総会をしていまして、いつも駆けつけてくださっていました。

先ほどデイヴィッドからも御紹介がありました、スーザンと昭恵さんの最初の共同セッションのポスターがあったので、ちょっとお見せしようと思って持ってきました。衆議院会館でやりました食と環境を考えるシンポジウムです。次、このポスターはハワイで2016年に行った日米国際海洋環境シンポジウムというものをやりましたね。それから、このポスターは2019年にニューヨークでやりました海洋環境ワールド

リーダーハイレベル会議ということで、これはキャロライ・ケルビーさんも駆けつけてくださって。もちろんデイヴィッドとスーザンも登壇していただいています。

もうこれに書ききれないくらい本当に盛りだくさんの環境活動を一緒にやってきていただいてありがとうございます。

このチャートをちょっと皆さんとシェアしたいのですけれども、水産資源の量です。左が世界、日本が右側になります。この赤いところがもう本当に枯渇している部分、そして黄色いところがまあまあまだ限界値まではありますよというところなのですが、両方結構枯渇している赤い印が多いと思うのですけれども、日本の状況は世界と比べてもさらに悪いというのが実のところ現状なのです。

今度は水産物の傾向ですね。世界では、実は水産物、シーフード、ものすごく生産量が増えています。なぜならば、天然資源が比較的日本に比べると安定していて、その上に養殖産業がものすごく伸びているのですね。それに比べて、日本を見てください。天然資源もだんだん減ってきていて、養殖産業も伸びていないというのが現状なのです。

なので、日本で食べているシーフード、実は山口県にお住まいの皆さんみたいに豊富な資源に恵まれているところは別かもしれないのですが、平均値で見ると52％は輸入に頼っているのが現状なのです。

では、共通課題。２つの言葉を覚えていっていただきたいんですが、IUU漁業、そして過剰漁獲。IUUというのは、違法・無報告・無規制の漁業の総称なんです。そして、過剰漁獲、これは取り過ぎですね。海の中の30％くらいの水産資源は、もう取り過ぎていますよというデータになっています。

じゃあどうしたらいいのだろう。例を３つ挙げさせていただきます。１つ目がヒラメ。これは、資源量と漁獲量の関係で捕らなければ増える。じゃあ、禁漁したらどうなるかというチャートを見てみましょう。

これ非常に残念なことに、2011年東北大震災で津波の被害に遭いました。福島県、こちら放射能の事故があったので、2011年から５年間一切規定漁業は禁止されていました。その間に、これだけ漁獲量がうなぎ上りになったんです。これが残念な結果だったんですけれども、全く捕らなければこれだけの勢いで増えるということを示してくれました。

でも、私たちお魚大好きですし、食べたいので、全く取らないのではなく、管理漁業というやり方があります。考えて適量だけ取って、みんなで少しずつ我慢をしながら回復するのを待つやり方。これをやっているのが、クロマグロです。これは、世界的にみんなで協力していまして、特に大西洋クロマグロですね。ヨーロッパの地域は６年間、３歳未満のちっちゃいクロマグロは全面的に漁獲禁止をしました。そして、大きいクロマグロも８割削減という厳しい措置をしたんですけれども、そのおかげで６年間で３倍に増えました。そして、絶滅危惧種から脱却しました。今は、みんなでおいしく頂けるだけの分量の漁獲がかなっています。

最後にウナギの例ですが、これは違法漁業の代表格とも言えるものです、実は。見てみましょう。全ての品種、ヨーロッパウナギ、日本ウナギ、アメリカウナギ、みんな絶滅危惧種になってしまいました。ちょっと食べ過ぎてしまったのですね。それと、違法なルートでの密輸入というのが激しく行われています。そういうことで、シラスウナギの資源量というのは非常に減ったのですけれども、見てください、右の表。

この突出した部分、ここは日本人が日本の中でたった１日に食べるウナギの量。これいつの日かわかりますか。そうなのです。土用のウナギの日です。こういう食べ方をしたほうがいいと思う方。ちょっと考えてみようかなと思う方。ですよね。なので、それをみんなで今日は一緒に考えたいなと思いました。食べちゃいけないのじゃないのです。別の日に食べましょう。

それで、おいしそうな左のウナギの特徴３枚ありますけれども、実は３枚のうちの２枚は違法性があるというふうに言われています。なので、気をつけながら適量を頂くのがいいかなというふうに思います。

そこで、私たちが提唱しているのが、ブルーシーフードガイドという持続可能性を私たちが科学の力を持って科学的に分析して、この漁種はおすすめ、このシーフードから優先して食べてくださいという優先調達という考え方でおすすめしているガイドです。これウェブサイトでブルーシーフードガイドというふうにすると出てきますので、ぜひ見てみてください。

それから、今日申し上げたいのは、先ほどデイヴィッドも申し上げましたけれども、改正漁業法が2020年に成立して、水産流通適正化法も2022年に施行しました。どうしてこれができたか。70年ぶりの大改革。これは、ほかでもない安倍総理が７年８か月という長期安定政権で、強いリーダーシップで法律を２つ立て続けに出してくださったそのおかげなのです。これで、やっと日本も世界に追いつける法律ができまし

た。早い者勝ちの漁業から、管理して、食べたい物を食べながら適切に管理して、ずっと食べ続けようという法律です。

この私たちの出したブルーシーフードガイドは、国連の海洋科学の10年の社会実装事例にも選出されています。私たちは世界中に仲間がいます。これは科学的な項目なので、御興味のある方はウェブサイトで御覧ください。

それから、地方自治体と協力しています。首長さんとＭＯＵを結んで、例えば三重県、そして広島県、東京都とは包括協定を結んでその地域版を出しています。そうすると、全国版では不合格だったものも地域版ではしっかり管理している地域ではブルーシーフードに認定することができるのです。

それから、楽しくないと続かないよねということで、おいしく、楽しく、地球に優しく、さらに自分もきれいにということで、ブルーシーフードビューティーブックというのもウェブサイトで発行していますので、ぜひ見てみてください。

それから、ブルーシーフードパートナー、70社ぐらいになっていますけれども、一部上場会社もありますが、居酒屋さん、レストラン、それから学校、地方自治体、県、市、村、皆さんと包括協定を結んでいます。それから、京都大学、富士見学園、いろんな学校の団体とも結んでいます。皆さんで一人一人どんな団体でもできることがあります。

それから、個人の皆さん、家庭内でもできることがあります。ブルーシーフードガイド、ウェブサイトで検索していただいて、今日何を食べようかなと迷ったときには、ぜひそのリストから優先調達をしていただければと思います。

本日は、御清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会　井植様、ありがとうございました。

ただいま御講演いただきました講師の皆様から、この数日間山口県内の様々な場所で視察をされたというお話もありましたが、ここで安倍昭恵様から皆様に改めて感想を聞いていただきたいと思います。安倍昭恵様、よろしくお願いします。

○安倍昭恵　本当にすばらしい御講演ありがとうございました。

ちょっと時間がないので、ものすごく早口で皆さん御理解いただけたかどうか分かりませんけれども、海の環境を守っていくことがいかに大事かということは御理解いただけたんじゃないかなと思います。

この２日間山口県を回っていただいての感想をちょっとお１方ずつ伺えればと思います。その後、会場から質問を受けたいと思いますので、質問がおありの方はその後挙手を頂ければと思います。

Susan: Well, I would say that there is such immense beauty in the oceans, the forests, and the attention to design. I really, really loved visiting the family that makes salt and seeing the care, the attention, and the art. It has been wonderful to witness so much of the art that is found in everything that’s being done in this particular prefecture.

With so much immense beauty, our hope is that we can let our friends and colleagues know about Yamaguchi and have them visit and understand what is going on with all the different initiatives here, from medicinal plants and working on organic agriculture, to the work that Minako’s doing with the seafood guide and celebrating the beauty and craftsmanship, the harmony of Blue-Green and the art of craft, and everything else that’s done here.

○スーザン・ロックフェラー　山口県を訪問させていただいたんですけれども、本当に美しい自然、特に両方、海と森林の自然、これに大変な感銘を受けました。また、古くから残っている町並みも大変美しいものがありまして、造形美にも大変心を打たれました。そして、アートについても今からお話をさせていただきます。

アートについては、深い造形美に関して大変な感銘を受けました。またニューヨークに戻りましたら、山口県のすばらしさ、これを芸術分野でもそうですし、農業分野でも漁業分野でもそうなのですが、様々な分野での山口県のすばらしさを友人に、そしてアメリカに発信してまいりたいと思っています。ありがとうございました。（拍手）

David: I will add a few words. Thank you so much for the question, and Akie for guiding us through Yamaguchi Prefecture, which we had never seen before.

And we were lucky enough to start in Shimonoseki, to arrive at Yuya, and to see on the west and north this extraordinary coastline and the beautiful mountains. It occurred to me that this is a very special place because you have water on three sides.

I can understand how people living here--looking at the beautiful Japan sea, so blue and windy

yesterday, looking at the beautiful mountains, with the forests intact-- could ask the question: is there really a problem here?

But when our wonderful scientists look more deeply at the conditions of the oceans underneath the beautiful surface, or the condition of the land underneath the forest, they are discovering some disturbing trends that we all need to know about and face.

So, my wish is that the residents of Yamaguchi Prefecture will continue for centuries to appreciate, love, live in this beautiful environment and, at the same time, have your eyes and ears open to the underlying problems which you, and we, can all manage.

Thank you very much for your warm welcome.

○デイヴィッド・ロックフェラー・ジュニア　昭恵様、本日は誠にありがとうございます。そして、過去数日間の間、山口を案内していただき、またいろいろな場面で私たちをガイドしていただき、心より感謝申し上げます。

私たちは、最初下関で旅を始めて、そして油谷にまで行けたこと、大変光栄に思っております。山口県の西から東まで幅広い場所をカバーさせていただきました。そして、ここ油谷また山口は３つのいわゆる海に囲まれているということを伺っております。

そして、私はこの大自然を見て容易に想像できるのは、皆さんが美しい海、そして美しい森林、山を見て、本当にサステナビリティーに関して、この国って問題あるのかというふうに疑問を抱かれるかもしれません。

しかしながら、私たちの科学者が指摘をしておりますのは美しく見える森林の土壌が汚染されていたり、美しく見える海の表面の実は奥深くにはいろいろな問題が起きているということでございます。

私が望みますのは、山口県の皆様におかれましては、愛を持って今ある環境に感謝をし、毎日を生きていく。これと同時に、起きている問題についてもぜひ目を向けていただきたいと思っています。それらの問題は、あなたも、私も、両方が協力をすることによって必ず解決できる問題だと思っております。

ありがとうございました。（拍手）

○安倍昭恵　ありがとうございました。

それでは、会場から御質問を頂ければと思いますが。先ほど吉田先生、寝ずに考えたという質問があるということで。

○観客１（吉田真次）　今日は、本当にありがとうございました。貴重なお話を聞かせていただきました。

今日の講演を聞いてもたくさん質問を思いついたんですが、時間がないということですので、一つだけお伺いをさせていただきたいと思います。先ほど申したように、やっぱりこの地域は海に囲まれていて、いかに海洋環境が大事かというところの中で、マイクロプラスチックの問題、これについて一つお伺いをさせていただきたいと思います。

やはり、世界でも重要な指摘をされているこの問題ですけれども、私たちこの海に近い地域に住んでいる我々ができることは具体的にどういうことがあるのか。それからもう一つ、このマイクロプラスチック問題で先進的な地域というか国というか、どのようなことをなされているか。その点について、教えていただければと思います。

David: Thank you so much for this important question. For the 1 1/2 questions.

Microplastics, as you correctly say, are a very difficult problem, especially as they become micro and we lose sight of them.

The problem, of course, is the expansive use of plastic around the globe, especially single-use plastic, which often breaks down very easily into microplastic, meaning plastic pellets that you can hardly see.

I think the best solution is to stop using plastics in the volume that we do, especially single-use plastics, and find alternatives. After all, Japan has been the leader in exquisite packaging in alternative forms for centuries and millennium.

The many gifts which you have so graciously given to us, they did not come in plastic bags, they came in beautiful paper, in wooden boxes— this is the tradition of Japan. And Japan, I think, could lead the way globally in reminding us about sustainable packaging and getting us free from single-use plastic.

Of course, it’s not just packaging which is the problem, it’s also the use of plastic bottles. I think one of the them is right here, and I am happily using it, but we need to get away from plastic bottles. What are the alternatives? We have metal, aluminum cans, there are increasingly paper bottles, and, of course, glass. All of these are better than

plastic.

I hope that begins to be a satisfactory answer. Thank you for the question.

○デイヴィッド・ロックフェラー・ジュニア　ご質問頂きありがとうございます。

マイクロプラスチックの問題は、御指摘のとおり、大変重要な問題がございまして、特にマイクロプラスチックはマイクロになって見えなくなってしまうとトレースができないというのが、大変な重要な問題になっています。

最も多くの問題は、特にプラスチックの用途が広がっていることでございますが、その中でシングルユースプラスチックというものを使っていることが一番大きな問題です。シングルユースプラスチックというのは、リサイクルをされずに１回だけ使われるプラスチックですね。それらが、小さくなって見えなくなってマイクロになっていく。これが一番の問題です。

解決策としては、やはりプラスチックの代替品を探すことでございます。プラスチックではない様々な原料、例えば生物バイオ原料を使ってプラスチックを代替していくということが大変重要になっています。特に、日本は梱包材においてリーダーとなっておりました。様々な美しい造形の梱包材を世界でリードしてきた日本に、この分野においてもやはり牽引をしていただきたいと思っています。

私たちは皆様から様々なお礼品、記念品を頂きましたが、どの記念品をとったとしてもプラスチックのビニール袋で頂いてはおりませんでした。皆紙で包装されて、そして梱包材は木でできておりました。これが日本の美しき文化でありまして、日本に原点回帰をしていただき、そして世界をリードしていただきたい分野でもあります。

もちろん問題は梱包材だけではございません。例えば、私が飲んでおりますプラスチックボトル、ペットボトルが大変な問題になっています。私は、このペットボトルから今水を飲んでいるのですが、これを代替することは大変重要になっています。その代替する原材料としては、やはり３つございます。１つ目は鉄、２つ目はアルミニウム、そして３つ目はガラスです。この３つどれをとってもプラスチックよりはるかに環境にとって優しいと確信をしております。

なので、日本にとってこの分野でリードしていただきたいと思っています。質問ありがとうございました。（拍手）

Susan: Just one more thing to think about, in terms of concrete action, is to see if there are ways to make institutions like universities, schools, and hospitals single-use plastic free. That would be one concrete way to reduce plastic.

For instance, the vending machines that are so popular here. You can choose aluminum, plastic, and maybe glass, I' m not quite sure. But since I' ve been here, I always choose aluminum, the green tea in an aluminum bottle or can. So, again, it gets down to choices that matter. From a policy standpoint, you could try to implement policies in institutions that you can control, such as a single-use plastic free hotel with no plastic utensils or plastic bottles.

○スーザン・ロックフェラー　１つの具体的な対策としましては、例えば学校や自治体、いろいろな施設においてプラスチック、特にシングルユースプラスチック、これを使わせないようにするということです。

例えば、日本で大変ポピュラーな、かなり多く見かけるのは自動販売機の存在でございます。自動販売機は、ほとんどペットボトルですよね。そこを、例えばなんですけれども、ペットボトルではなくて、代替品としてガラスの自動販売機、あるいはアルミニウム、鉄でできた梱包材の販売機、そういうものを日本で浸透させていくこと、これが政策からできることなのではないでしょうか。また、私は抹茶をよく好むのですが、ペットボトルで抹茶は飲まないようにしています。ガラスやアルミニウムでできた梱包の容器で飲むようにしております。なので、このように政策から様々なサポートを頂ければと思っています。ありがとうございました。（拍手）

○安倍昭恵　もう少し時間がありますけども、ほかにどなたか。

○観客2（松浦奈津子）　すばらしいお話を聞けて感動いたしました。私たち今一人一人ができることをしっかり考えてやっていきたいなというふうに感じました。

スーザンさんに質問なのですけれども、今映画を、10年前に先ほどのマーメイドの映画を作られたということなのですけど、そこで今変えていこうという映画でこの10年で人々の意識はどのように変わったと思われますか。また、今後どういう活動をされていきたいか少しお伺いできればと思います。

Susan: Thank you so much for that question. I had actually done a film before "Mission of Mermaids" called "A Sea Change: Imagine a World Without

Fish." It won a NOAA award; it was on Discovery--but I was preaching to the choir of scientists.

And what I found with "Mission of Mermaids" is that it struck a chord globally and went to festivals around the world where I had mermaid ambassadors that were trained to talk about ocean issues. That was one surprise with this particular film. But I think in the 10 years since this film has been made that there has been so much more media attention on plastic pollution, seafood fraud, human rights issues at sea in terms of slave labor.

There are so many different things in the news today that are educating people, and alarming people, regarding what's happening with our oceans.

The good news is that both David and I sit on the board of Oceana, and Sailors for the Sea Japan is powered by the science of Oceana and Minako's colleagues. We work country by country, and every county has a 200-mile limit and can protect their oceans. That is our theory of change. If we go country-by-country we can save the oceans and feed the world. And it works.

One last exciting thing to mention is that Oceana partnered with Google and SkyTruth to create something called Global Fishing Watch. It's a satellite-based, almost real-time surveillance able to monitor sea vessels and see which vessels are doing illegal fishing. The innovation that's happening with technology is allowing us to solve many ocean problems, and save the fishery sources as a result. So, I am very optimistic about technology being able to save the oceans with the mapping and surveillance capability.

○スーザン・ロックフェラー　御質問ありがとうございます。

もう一つ今御覧いただいた映画の前に作ったものがありまして、「A Sea Change: Imagine a World With No Fish」、つまり海の変化、魚がいない海を想像してみてくださいというタイトルの映画を作りました。これはディスカバリー、いわゆるその海を探索していく映画なんですが、海洋保全に重点を置いた一つの映画となっています。

また、様々なアメリカ、世界各国で催しを開催させていただきました。そこで、マーメイドアンバサダーという海洋保全に関するいろいろな講演をしてもらったのですけれども、それらの活動を通じてメディアで大きく海洋保全について、海洋環境について取り上げていただくことがこの10年でできました。それは、プラスチックの話であったり、海洋汚染全般に対しての話であったり、あるいは漁業組合の人権問題に関するヒューマンライツの問題であったり、いろいろな分野で多くの国民に、あるいはその世界中の方々に浸透をしていただけたと思っています。

いいニュースとしては、私はオセアナという世界最大の海洋保全の理事を務めていると同時に、セイラーズフォーザシーの会長も務めております。そして、セイラーズフォーザシーとオセアナは両方密接にコラボレーションをしておりまして、オセアナの科学者によって科学を用いた実践的なソリューションを締結することをしています。また、その一つの事例といたしましては、200海里、ＥＥＺという排他的経済水域があるのですけれども、１つの国ごとでの活動にフォーカスをしています。つまり、国ごとに最適されたソリューションを一緒に考えていくということでその結果、世界中の海を守っていくことにつながるのではないかと思っています。

もう一ついいニュースとしましては、私はグーグルとスカイ・トゥルースSky Truthという会社と提携しまして、オセアナですが、これは衛星を使って海をモニターしていく。海をモニターしていくことによって、違法な漁業だとか様々な海のコンディションをチェックしていく。このような取組を始めました。なので、私は大変楽観視しておりますのは、技術の革新によって海洋をより美しい状態に保っていく、このようなことができるのではないかと思っております。ありがとうございました。（拍手）

○観客2　ありがとうございました。

○安倍昭恵　もう１人、手を挙げておられました。じゃあ最後の御質問ということで。

○観客3　僕は現役の漁師ですけど、ちょっと沿岸漁師の立場で一言。

太平洋クロマグロについて、乱獲が原因だということでロックフェラーさんも講師の先生もおっしゃいましたけど、この乱獲というのは大手のまき網と中国、韓国のまき網が原因でございます。僕ら沿岸漁師、釣りでマグロを釣る漁師、定置網でマグロを捕る漁師というのはどちらかというと被害者なのですが、これ市も県も国もこれに対する救済は一切ございません。

僕は、違う立場の人間、漁師以外の立場も持ってお

りますが、ずっとこれを訴えかけているんですよね。本当、ちょっとクロマグロとブリって違うかもしれませんけど、富山の氷見の定置網は300年も続いて、だからってブリは絶えていないんですよね。だから、定置網とか釣りは環境には優しいものだと思います。

だから、大手のまき網、これ日本も中国も、あと東南アジアのほうもやっておられるそうで、だからそちらの規制をきつくすれば多分これ資源回復になると思うのです。

先ほど大西洋のクロマグロの件ありましたよね。先生おっしゃいましたけど、あれもたしかまき網の規制をして、その規制も結構細かいことを言ったらいろいろあるのですよね。産卵期のクロマグロを一網打尽にするのだけど、そこで縄を締めないで網のまま時速１キロぐらいのスピードで漁港まで持ってくると。そしたら、そのゆっくり走っている間にマグロは産卵して稚魚を増やすというふうになると、マグロも獲れる、稚魚も増えるというようなこともやっておられます。

ちょっと質問が長くなりましたけど、ロックフェラーさんにその沿岸漁師のことを解決してくれとは言いません。そういう認識を持っていただきたいです。だから、本当沿岸漁師というのはこの規制の被害者です、言ったら。そういうことで、返答をよろしくお願いします。（拍手）

○安倍昭恵　今日は、国会議員や県会議員の先生方もいらしているので、しっかり聞いていただけたと思います。ロックフェラー御夫妻には今のことを御認識いただきたいということで、ちょっと井植さんから一言。

○井植美奈子　すばらしい質問ありがとうございました。

おっしゃるとおり、大中まき網、非常に大きな漁船団で大きな漁獲量を持ってやっておりますけれども、御存じのとおり、RFMOという世界の国際協定の機構がございます。その中で、ICCATという西北大西洋のところは非常に厳しい管理を先にやりました。

今度、それに倣って太平洋の管轄のエリアも新しいルールを導入しました。それで、だんだんと資源量が増えてきたのですけれども、資源量が増えていけばその規制はだんだんと緩くなるということがまず１点。

それから、おっしゃるとおり、沿岸それから近海の漁業者の方たちはまず漁業をしていらっしゃる。網に入ってくるものを捕ってくる。それは、重々私どもも承知しております。

その中で、新しい法律ではTAC:Total Allowable Catchということで全ての漁獲の上限を決める。その中で、さらにIQ: Individual Quota、それぞれの地域がそれぞれの持ち分を決められていく。さらにこれが発展していくと、船ごとに漁獲量を決めていくというルールも海外では存在しています。

日本では、それはまだ導入していないのですけれども、様子を見ながら漁獲量が公平に配分されるようにというのは私たちの願いでもありますし、水産庁も多分重々御存じと思いますので、ルールをまず変えて、それでみんなで共有財産である水産物を大切においしく頂けるようになればいいなというふうに私どもも努力してまいりますので、どうぞまたいろんな情報を私どもにも頂けるとありがたいと思います。（拍手）

David: I could add something to that, on behalf of Oceana, which works globally, not just here in Japan. We are very frequently the partners of the artisanal fishermen, such as you, and we are very happy about that, because usually the problem, as you suggest, is the large, industrial fishing boats which can catch thousands of fish in a day, not the smaller boats.

So, the approach of Oceana is to help the artisanal fishermen form political alliances that can be as strong as the industrial fishermen’s. This is not easy, but we have practiced this especially in South America. For example, we suggest that the first three miles, or the first five miles, off the coast be limited to fishing for artisanal boats and not big boats. This is one idea, but it takes political organization and support for conservation from the artisanal fishermen, and then we can work together.

But thank you very much for this important question; it illustrates how complex these problems are humanly, technologically, politically, so Oceana and Sailors for the Sea Japan would love to partner with important people such as yourself. Thank you so much.

○デイヴィッド・ロックフェラー・ジュニア　貴重な御質問をありがとうございます。私はオセアナという世界最大の海洋保全組織に属しているのですが、その立場からも申し上げさせていただきますと、私はグローバルに活動しております。そして、私たちはいつもあなたのような沿岸漁業者のパートナーでおりますし、い続けたいと思っています。あなたがおっしゃるとおり、問題は大きな巨大な会社、これが１日に千、二千の魚を乱獲していくということが決定的な要因に

なっていると思っています。

オセアナとしては、世界中の沿岸漁業者とパートナーシップを組もうとしております。その一つの目的としては、大きな漁業の会社に対抗するために小さな、いわゆる沿岸漁業者を集めて政治的なアライアンスを組んで対抗していくということでございます。一つ例を申し上げさせていただきますと、南アメリカにおいて、例えば沿岸から３マイルあるいは５マイルのところでは大企業が入ることはできない。その中は、沿岸漁業者専用の漁業の場所にしていこうと。そういうような取組をさせていただきました。これらを世界に広げていきたいと思っていますが、なかなか簡単ではございませんが、そのような取組を一つ例として挙げさせていただきます。

本当に重要な質問をしていただいて、ありがとうございます。あなたの質問は、事態の複雑性を表す本当に重要な質問だと思っています。特に、人の問題あるいは技術の問題、そして政治の問題、いろいろな問題が複雑に絡み合っております。オセアナそしてセイラーズフォーザシージャパンは、あなたのような重要な沿岸漁業者のパートナーと一緒に前を向いて様々な問題について取り組んでいきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

○観客3　一言だけ。大変ありがとうございました。僕の認識不足でした。御立派な考えで、感銘いたしました。ありがとうございました。（拍手）

○安倍昭恵　ありがとうございました。理解できてよかったと思います。

この後、ロックフェラー御夫妻はお仕事で香港のほうに行かれなければいけないので、この後のシンポジウムに本当は御登壇いただきたかったのですけれども、ここで御夫妻には御退場いただきます。

今日は、ロックフェラー御夫妻、そして井植美奈子さん、彼女は小学校のときから私の後輩で、大変優秀な後輩でございますけれども、ありがとうございました。Thank you very much.

■ 展覧会のオープニングセレモニー

○司会（高松綾香）　初めに、水谷由美子実行委員長より御挨拶申し上げます。

○水谷由美子　皆さん、本日は、ブルー＆グリーンアートプロジェクト2023に、「幸せは手仕事にやどる」展にお越しいただきましてありがとうございます。また、ご来賓の皆様、ロックフェラー夫妻、パネラーの皆様など、御参加いただきましてありがとうございます。

さて、時間が迫っておりますので、簡単に紹介します。陶芸部門では大和保男先生、坂倉新兵衛先生、そして坂倉正紘先生が友情参加として今回、作品を展示して下さいました。

次に山口ファッション＆テキスタイル研究所と山口企画デザイン研究所の皆さんが、服飾、タペストリー、生活用品などを出品して下さいました。

ここで記念として、サステナブルな視点から大田舞さんがデザインされましたテキスタイルによるワンピースを、色違いでスーザンさんと昭恵さんに贈呈したいと思います。ここで展示されているものです。普段に着て頂ければ幸いです（写真4）（写真5）。

写真4　基調講演・パネラー・コメンテーター登壇者、作品出展者、来賓

写真5　左からスーザン・ロックフェラー、大和保男、デイヴィッド・ロックフェラー Jr.、水谷由美子

■ シンポジウム

事例紹介の部

○**司会（高松綾香）**　本日はお忙しい中、お越しくださり、誠にありがとうございます。

では、まず初めに、ブルー＆グリーンアートプロジェクトの事例紹介としまして、当実行委員会委員長の水谷由美子より、今まで取り組んでまいりました山口県内における過去の活動や、その背景となる山口県の手仕事について皆様に御紹介いたします（写真6）。

写真6　水谷由美子プレゼンテーション

○**水谷由美子**　皆さんこんにちは。今まで長門市の皆様とは一緒に、アグリアートフェスティバル、そしてブルー＆グリーンアートプロジェクトを作ってきていただきました。この中にはファッションショーに出ていただいた方もおられます。改めてお礼を申し上げます。

それでは、本日は、ちょっと全体が押しておりますので、予定時間より少し短めに、私はプレゼンテーションをさせていただこうと思っております。

本日のBGAP2023には「幸せは手仕事にやどる」という副題がついております。手仕事が、地域はその特色を生み出す、そして作り手には創る喜び、新しいものを創る力、そして使い手には温かさや優しさ、親しみといったものをもたらすのではないかというポイントでお話をさせていただきます。

手仕事という言葉、これを柳宗悦が『手仕事の日本』という本の中で、先ほどに近い内容を既におっしゃっておられます。この本の原稿は昭和18年に完成されていましたので、戦前に既に現代と同じような問題意識を持っておられたんだなというふうに思っております。

この柳宗悦さんは、山口をくまなく歩かれました。この本の中に紹介されているのは、防府市の堀越とか佐野の窯場、萩焼、小月の窯場、それから、この長門市、私もこの本から初めて知ったんですけれども、長門細工があって、もともと紙縒（こより）と呼びますけれども、そういった細工が昔は長門市は非常に盛んで、そして、それを矢筒とか、ああいったものを作る。紙でよったものを編んで、そして、それに漆を塗って固くしてという、そういう伝統のものなんですが、そういうのがあったということを知りました。そういうのを、長門市は、今、やっていらっしゃるかどうか分かりませんが、全国ではそこから長門細工というふうに言われたということでございます。

それから山口市に合併しておりますけれども、徳地というところの手すき和紙、それから赤間硯、そういったものが戦前に発見されているというか、全国に紹介されているわけでございます。

本日は、簡単に、生活着や仕事着に見られる山口のサステナブルな手仕事とデザインという視点でお話をさせていただきたいと思っています。

裂織による着物のアップサイクルということで、この裂織というのは、全国にも見られる技法ではございますけれども、山口でも行われておりました。襤褸（ぼろ）になった着物や捨てられる、不要の和紙、そういったものを裂いたり、切ったりして、糸状にして、撚って緯糸を作ります。麻糸や木綿糸、時には絹糸を縦糸とし、先にできた緯糸で織ります。私は服飾の専門で、織物の専門家ではありませんけれども、私もその伝統的な裂織をやってみた、そして作ったものでございます。これが今日はビスチェとなって、展覧会場で展示させていただいております。

これは、現在、萩博物館で所蔵されております相島

で作られた裂織の上着でございます。この地域では裂織をツヅリとも言っております。

萩博物館の学芸員の松尾優平さんのリサーチで、裂織の分布、現在、文献で現れていますのがグレーのところで、濃くなっている部分が実際の裂織が発見されているところということでございます。

そういう伝統を見直すために、昨年のBGAPでは、展覧会のみを山口市で行いました。そこでワークショップをして、裂織を来場者の皆さんに伝えるという活動をいたしました。私も初めて裂織でタペストリーを作りました。もう作るのが楽しくてしょうがない。だから、ぜひ皆さんもやりませんかと。身近な、家にあるいらない布を使って、簡単に織れます。

これは展覧会のときの様子でございまして、この黄色とか白の布は、厚生労働省がいらなくなったマスク、あれをほどきまして、１枚のガーゼになるんです。あれは本当に無駄のないガーゼだったんです。すみません、アベノマスクともいう、ちょっと小さい声で……。それをオーガニックタマネギの皮を使って、家の台所で染めました。今までのシンポジウムで捨てるものは何もないという、その言葉に私は感動しまして、私も家の中でやってみたという、そういうことでございます。

そして、これが今、ステージをディレクションしています原田くんが卒業研究でやったもので、茜染めと、ブルーは藍染めになっていますけれども、これは防府市の夕日のイメージを衣服に表しております。裂織の作品です。

次が、紙布と紙子から和紙の服飾造形ということで、ここに書いてあるとおりでございますけれども、伝統的に、地域のほうで紙を無駄にしないということで、紙で着物を織ったり、帯を織ったりということが、東北では顕著に見られます。やはり山口でも、先ほど言ったように、その事例がございます。背景としては、木綿の布が手に入りにくいとか、そういった経済的状況、あるいは紙すきの産地とか、あるいは北前船の寄港地で、他の地域、東北などの文化的な影響、そういったものから、山口県でも行われていたということでございます。

これは山口が誇るべき資料『防長風土注進案』というのがございまして、1841年に、紙という言葉が、上質紙はまた別の表なんですけれども、一般的な紙が、この注進案に書かれたところを、山口大学がドットをつけて表にしたものでございます。やはり中心が、山口の徳地周辺のところが、現在も僅かに残っておりますけど、そういうことでございます。

そして、裂織の分布でございます。

そういった背景をもちまして、淺田陽子が自然素材の紙と毛糸によるニット技法編み物で作った非常にすばらしい作品です。彼女は残念ながら、今年の２月に亡くなってしまいまして、私の大学院の弟子でしたけれども、この場でちょっと紹介をさせていただきたいと思います。

これは私が昔作ったもので、これは織ったものではなくて、いわゆる紙ですが、それにこんにゃくなどを塗って、丈夫にしまして、作った作品でございます。

これは着物のサステナブルなライフサイクルということで、皆さんも今まで子供の頃に年配の方だったら経験されているようなことでございます。体型、要するに身長や幅やら、我々は成長とともに変化しますが、そういったものを調整する機能があるということです。

そして、次は縞織の伝統からmompekkoの開発をしました。柳井市に西蔵というところがありまして、そこで復活した織物を普及するという活動をやっておられます。シマモメンという言葉がありまして、やはり『防長風土注進案』におきましては、柳井市周辺の市町村、そして周防大島、ああいったところが中心に、その言葉が頻出しているわけです。

そして、これは柳井市で見つかりました昔の縞帳でございますね。注目は、藍染め、藍色が強いと思います。昔はやはり藍が庶民の中心の染め物でございまして、こんや、あるいは、こうやと言われておりますけれども、三田尻を中心とする辺りで言葉が頻出しております。なんですけれど、実は紺屋は県内全体にありました。これは周防大島をリサーチしたときに、明治時代に化学繊維とか化学染料が入ってきたときに、県が質を担保するために証明書を出します。それによって紺屋が使用している染料や染め方を保証したものです。周防大島、玖珂そして熊毛がこの制度に参加されました。

2003年に、柳井縞の会の方から柳井縞の復活10周年記念のファッションショーのプロデュースを頼まれまして、左が県大のもので、右が伝統的な着物の発表でございます。

そして、これは、昔、昭恵夫人がモデルで着てもらったものですけれども、金子みすゞの写真に現れた着物の縞模様を、新しい柳井縞として柳井縞の会の会長さんに織って頂きました。この糸は有機栽培によるマニラ麻です。

しかし、伝統的な織物で、今の生活の中に商品化し

ていこうと思うと、コストが合わないわけです。ということで、私どものmompekkoの開発におきましては、新しい山口縞ということで開発をして、機械織を導入しまして作ってきたということです。その間、山口県立柳井商工高校も、今、手織りに取り組んで、小物の開発をされています。

これが2019年のファッションショーのために開発した縞織で作ったmompekkoです。ちょっとボケていますけれども、昭恵夫人も真ん中で、モデルになっていただいているところです。

このとき、フィンランドやハワイの大学生たちも来てくれて、一緒にショーを盛り上げてくれました。

先ほどジレンマの話をしました。アートとしての表現とか、伝統へのリスペクトがあっても、生産方法を模索しなければいけない。伝統技術の体験による理解、行動への動機づけが、これからワークショップなどを通じて必要なのではないか。新しい創作意欲の喚起をしていきたいということで、今日、皆さんが、この後のシンポジウムで、そういうお気持ちになっていただけたらいいなということでございまして、ちょっと早口で申し訳ございませんでしたけれども、ご清聴ありがとうございました。（拍手）

■ パネルディスカッションの部

○司会（高松綾香）　それでは、パネラーの皆様、コメンテーターの皆様、どうぞ壇上にお上がりください。お願いいたします。

ありがとうございます。本日、パネラーとして、環境省前事務次官、中井徳太郎様にお越しいただく予定でしたが、急遽、御都合により御欠席となりました。そのため、中井様に代わり、一般社団法人the Organic代表理事、小原壮太郎様にお越しいただきました。小原様、ありがとうございます。（拍手）

そして、江原市長は、この後、御公務があるため、午後１時に退席となります。ご了承ください。

では、ここからの進行は、本日のモデレーターであります一般社団法人日本ウェルビーイング推進協議会代表理事、島田由香様にお願いいたします。それでは、島田様、お願いいたします（写真7）。

写真7　左から江原達也、安倍昭恵、島田由香

○島田由香　ありがとうございます。皆様、こんにちは。これから、大変興味深いテーマでのパネルを皆さんとやらせていただこうというふうに思います。13時になりましたら、市長が出られてしまうということもありますので、折々、コメントをいただきながら、進めていければというふうに思っております。

今日、皆様、ここの上に出ているタイトルを見ていただいたときに、海も陸も当たり前のように使ってきている言葉ですし、皆さんの暮らしの中、毎日の中にあるものだと思うのですが、ウェルビーイングって何というふうに思われたのではないでしょうか。この言葉、すごくこれから大事になっていきますので、私が簡単に、分かりやすく、それが一体何なのかというところを先にお話しさせていただいて、そこから、皆様の興味深いお話を聞いていこうというふうに思います。少しだけお時間をください。

改めまして、一般社団法人日本ウェルビーイング推進協議会と、このウェルビーイングを日本全体に大きく広げていきながら、皆さんと一緒に日本のウェルビーイングを上げていくという活動をしております島田と申します。よろしくお願いいたします。（拍手）

ウェルビーイングというのが何なのか。これはWELL-BEINGって、こういう英語から来ているものなのですけれども、簡単に申し上げますと、幸せとか、継続的幸福って、こんなふうに訳されることが多いのです。片仮名ですと、ウェルビーイングとイングって、昔習ったのを覚えているかもしれません。今の状態という意味です。今、この瞬間ということなのです。

WHOという国連の機関では、心身共に健康で、社会的によい状態というふうに定義されているのですが、これって何となく分かったようで分かりにくいかなと思っていまして、一言で言いますと、 WELL「よい」という意味です。BEING「状態」という意味で

す。つまり、今、皆さんがそこにお座りになられていながら、何かいい感じ、いい調子って思えていたらオーケーということなのです。日頃、いろんなことが起きると思うのです。必ずしもいいことばかりじゃないと思うのです。それでもいいのです。なんだけれども、全体的に言ったら、なんかいい感じ、いい調子って思えるかどうか。つまり、自分が、今、どんな状態なのかというのに意識を向けようと、ここからスタートするものがウェルビーイングなのです。

何でこれが今すごく大事なのかというと、政府も２年前の成長戦略、骨太の方針という、日本はこういうことやっていくのだというふうに伝えていく大事な書類があるのですけれども、そこに、このウェルビーイングというのを載せたんです。

何でこれが重要か。ちょっとデータをお見せしたいと思います。例えば、皆さんがお仕事をされる職場、家庭も一緒です。皆さんが集まられるところ、役場も一緒です。住民の皆さんが集まられるコミュニティーも一緒です。そこに幸せがあると、例えば、変化が大きくても、それに適応できる人が45％もいるとか、あるいは、イノベーション、創造性が３倍になったり、生産性とか、あるいはパフォーマンス、そういったものが上がるよと。逆に、あったら困るもの、例えば病気になってしまうとか、欠勤だとか、ちょっと具合が悪い、うつ、あるいは退職、こういったものはないほうがいいじゃないですか。あったらいいと思うものの数値が増えて、これがあったら困るなというものの数値が減るということが分かっています。したがって、ウェルビーイングというのは、今、暮らしや仕事や人生の中で、本当に基本の大事なものなんだよと。

こういったことを学問として、ポジティブ心理学という新しい学問の中で、その創始者の先生、マーティン・セリグマン博士というペンシルベニア大学の先生が20数年研究してこられています。そこから分かっていること、ウェルビーイングというのが高い人、つまり、なんかいい感じ、いい調子って思えている人は、なんと健康で長寿だと。そして、人間関係がよいではなくて、すばらしいということが分かっていて、パフォーマンスも上がりますし、創造性も上がって、社会性も増えて、そしてレジリエンスといって、片仮名ばかりで恐縮ですが、何か大変なこと、嫌なこと、困ったことがあっても、乗り切っていける力という意味です。人間なので、そういうとき、弱ってもいいんです。もう駄目だってなってもよくて。でも、ウェルビーイングが高い人は、そういうときにも、よし、やっぱり頑張ろうというふうに、また立ち戻れる。こんな力が増えるよということが分かっているのです。

ですので、皆さん、これを見たら、自分のウェルビーイングが高いほうがいいなと思うと思いますし、それから、御家族の皆さんもこうだったらいいですよね。それから、大事な職場の社員の皆さんもそうですし、きっと市長でいらっしゃったら、長門の皆さんがこうだったらいいですよね。今日は国会議員の皆さんもいらっしゃって、国のことを考えられていると思います。やはり日本国民がみんなこうだったらいいわけで、今日は、ここには会社のリーダーの方もいらっしゃるかもしれません。やはり自分の会社の社員のみんながこうだったらと思うと、これは全員にとって大事なことで、そして幾つかポイントを申し上げると、ウェルビーイングは自己責任なんですということです。自分で自分のウェルビーイングに気をつけながら、健康診断って受けますよね。健康には気をつけているけれども、幸せに気をつけていない人がいるかもしれません。なので、ぜひ自分の幸せにも気をつけていきましょうと、これがウェルビーイングの考え方になります。

ちょっとだけ説明しておくと、幸せという言葉は、英語にすると３種類の書き方があって、混乱してはと思ったので、ちょっとこれを持ってきました。ハッピーという感情の幸せというのもあります。それから、今日お話ししているウェルビーイング、ちょっぴり中長期的になります。ハッピーというのは、上がったり、下がったり、幸せになったり、そうじゃなかったり短期的です。でも、ウェルビーイングというのは状態なので、少し中長期的。例えば、いろいろあるけど、この１か月間、何かいい感じ。これがウェルビーイングです。これを総称して、まとめて、ハピネスという言い方をしたりしています。このハッピーな人も、そうじゃない人より、これだけ差があるよということも出ていたりするので、一言で言えば幸せだといいことがいっぱいと、こんなふうに覚えておいていただければいいかなというふうに思っております。

ということで、ウェルビーイング、何となく分かっていただけたらうれしいなと思います。今日は時間がないので、ここで終えるのですが、実は、このセリグマン博士は、どうしたら私たちのウェルビーイングが上がるかということも教えてくれています。５つのポイントがあるんだよと。実は、その中の一つがつながりなのです。今日は、手仕事という、先ほど水谷先生が御説明くださいましたけれども、手という表現で

いろんなことが表現できるなというふうに思いました。手を取り合っていくとか、今日、ロックフェラー御夫妻も、何回も英語でwork togetherとおっしゃっていたんですね。一緒にやっていこうという意味です。手を取り合って、一緒にやっていこうという。なるほど、だからウェルビーイングなんだなって、聞いていて思っておりました。

そんな観点から、海、陸、ウェルビーイング、少しつながってきてくださっていたらいいなと思うのですけれども。実は小原さんは私の盟友でもございまして、今日は御登壇いただけること、すごくうれしいと思っております。小原さんから、今日のテーマに関しまして、ちょっと短めにプレゼンテーションいただければと思います。自己紹介もぜひお願いいたします。

（写真8）

写真8　左から水谷由美子、葦津敬之、小原壮太郎

○**小原壮太郎**　島田さん、御紹介ありがとうございます。改めまして、私、中井前事務次官の代打としてまいりました、一般社会法人the Organicという有機農業を広げる活動を14年ほどやっております。小原壮太郎と申します。よろしくお願いいたします。（拍手）ありがとうございます。

私も、この山口、この長門、油谷を昨日も拝見して、もう本当に、森、里、川、海という自然の循環が一体となって広がっている美しい風景を拝見しつつ、美味しい海の幸、陸の幸をいただいてまいりました。そんな、このすばらしい場所で、今日、皆様にお話ししたいことは、この森里川海と地域循環共生圏という、環境省が政府の戦略としてうたっているメッセージ、これからの持続可能な社会づくりをどうやっていったらいいかということです。政府として、どういうふうに考えているかというところを、まず御説明しつつ、それが今日のテーマ、海と陸、そしてウェルビーイングにどうつながるかというところをお話しさせていただければと思います。

森里川海のつながりが生み出す恵みと自然の循環利用ということで、実は私、環境省の、つなげよう、支えよう森里川海プロジェクトというプロジェクトのアンバサダーを8年ほど務めておりまして、実は2018年に閣議決定、全大臣が集まって、いいねと決めた、合意形成した戦略が、循環共生型の社会をつくるというものでございました。

この森里川海、もう皆さんは、多分、実感を持って理解されていると思うのですけれども、山、森に雨が降り注いで、それが地面に浸透していくときに、木や草のミネラルを吸って、それが地下の湧水として流れていったり、川の水として流れて、これが里を潤して、里の、要は地面の恵み、農産物を育ててくれつつ、海に行くと、右端にプランクトンと書いていますけれども、そのミネラルがプランクトンを育てて、そのプランクトンが魚、魚類や貝類を育てて、陸の幸、海の幸も、自然の恵み、全てがこの水の循環系、森里川海の流れをつないでいる。

今、御存じのとおり、この自然の循環系は、いろんなところで傷んだり、壊れています。それをつなぎ直そう、支え直そうというのが森里川海プロジェクトの１つの目的なのですが、実はもう一つ、大きい重要な目的は、人つなぎなのです。やはり農山漁村で、その自然の恵みの環境を守っている農家さん、漁師さん、林業の方とか、いろんな方がいらっしゃいますけれども、そういう方と都市に暮らす方々が、やはりちゃんとつながって、支え合う関係をつくろうと。これはまさに地域循環共生圏ローカルSDGsと示してありますけれども、この地域循環共生圏、ちょっと漢字だらけで長くて、分かりづらいのですけど、簡単に言うと、循環共生型の地域を、それぞれの地域の特性、個性がありますので、そこに合わせた、それぞれの地域の循環共生型の社会をつくっていこうと。それがイコール、タイトルにございますローカルSDGs、その地域ごとにSDGsを達成するために何をやっていったらいいのと言ったら、循環共生型の社会を、各地域で、それぞれのスタイルでつくっていけばいいんだよというのが、この閣議決定した政府の戦略なのです。

これって、ちょっといろいろ難しく文字がたくさんありますけれども、左下に要素が３つまとめてございます。１つは脱炭素社会。やはり今、地球温暖化で、気候も変動して、皆さんも巨大化した台風の被害に遭ったり、大雨の被害に遭ったり、それから気候が本当に変わってきて、夏、とっても暑くなってきていま

すよね。私の仲間の農家の女性も、３年前に畑で熱中症で亡くなりました。もう本当に、農家の先人たちが、これはもう今までの常識で畑で作業をしていたら、こういうことになる時代になっちゃったねと。本当にみんな涙を流しながら語り合いました。それぐらい、やはり脱炭素という、地球温暖化を抑えながら改善していくこと、これも世界的にも重要なことですし、地域にとっても、これは死活問題ですので、この脱炭素社会をつくっていこうと。

そして、その次、循環経済。やはりサーキュラーエコノミーって海外でも言われますけれども、循環型の社会をつくっていく。それを経済も含めて循環型にしていこうと。

そして３つ目、分散型・自然共生社会、これが地域循環共生圏の肝ですけれども、各地域、東京一極集中とか、都市一極集中ではなくて、自立分散それぞれの地域が自立した自然と共生する社会をつくろうという、これを経済社会のリデザインって書いていますけれども、これが今、ピンチじゃなくて、社会を変える逆にチャンスであると。今までの概念とか仕組みを、もう本当に立て直して、新しい社会をつくっていくきっかけ、機会、チャンスにしようというのが、まさにこの地域循環共生圏、ローカルSDGsの考え方です。

これは中井前事務次官がいつもおっしゃる考え方なのですけれども、自立型の社会をつくるというのは、実は人間って37兆もの細胞からできていると言われていますけれども、要は37の生き物の塊なのです。人間も、その体の中の循環を壊していくと、肝硬変になったり、もう取り返しがつかない、どんどん壊れていって、いわゆる不可逆で戻せない大変な状況になる。だけど、これは人間の体と一緒で、日本、地域、社会も、みんなが自立分散して、ちゃんと一人一人が輝く、命が輝くような生き方ができる社会になって、ウェルビーイングが上がっていけば、必ず循環共生型の社会というのは成功できると。この左下、SDGs、哲学として、「No one will be left behind.」一人も取り残さない、一人も置き去りにしないで、みんなの一人一人の魂と心を大事にしていこうという、世界の目標で、哲学としてうたっているのです。これはまさに我々が考えること、世界が考えること、政府が考えること、全部が本当につながっているということなのです。

なので、これは右下に書いてありますけれども、地域の特性、地域資源の性質に応じて、最適な規模で地域資源がちゃんと循環するような社会をつくっていけば、みんなのウェルビーイングも上がっていくし、それがこれから未来に、ちゃんと100年、1000年つながる循環型の社会になっていくということなのです。

今日は、環境省、政府としても、こういう戦略を打ち立てているし、まさに山口、長門、この地域が自分たちに最適な規模で、自分たちの資源を循環させる社会を、ハッピーに、ウェルビーイングで生かしながらつくっていけば、必ず全ての社会問題、環境問題、経済問題は解決していくというお話でございます。

せっかくなので市長からもお話いただければと思います。

○島田由香　ぜひコメントいただければと思います。

ありがとうございます。

○江原達也　どうもすみません、長門市長の江原でございます。本日、この長門市で、最初に御礼をということで最初に、本当に、このロックフェラー夫妻をはじめ、昭恵さんを含め、各業界の本当にトップの方々に来ていただいて、ブルー＆グリーンアートプロジェクト2023が長門市で開催されること、本当に地元の市長としてうれしく思っております。本当に関係者の皆様に感謝申し上げたいと思います。ありがとうございます。（拍手）

そして、今の小原さんのお話なんですけれども、この長門市も、今、美しい海や里山などに手つかずの自然がたくさんあります。その環境下でしっかり育った食材を全国に発信していきたいというふうに思っておりまして、そういう意味では、今日のお話というのは大変すばらしく、この長門にマッチしたお話だというふうに思っております。この森里川海のつながりが生み出す恵みと、資源の循環利用に係る御説明、そしてローカルSDGsとして地域循環共生圏のお話、こういったものを、これからしっかりと長門市にも取り入れていきたいというふうに思っています。施策にしっかりと反映させていきますので、ぜひ御支援、御協力をお願いしたいというふうに思います。

○小原壮太郎　ありがとうございます。

○島田由香　小原さん、言い残したことは。

○小原壮太郎　いや、もうこれで。何も後悔はございません。本当に、今、市長にまとめていただいたとおり、これを地域の皆さんが理解して、自分たちの幸福、ウェルビーイングを高めてくださることが、本当に未来につながる。これは政府から、都道府県から、地域みんなの同じコンセンサスだと思うんです。やはりここに向かってみんなで動いていきましょうというのが、今日、この場の一番の目的だと思いますので、私からのお話としては、今日これにて締めさせていただきた

いと思います。ありがとうございました。（拍手）

○**島田由香**　ありがとうございます。サステナブルという言葉とウェルビーイングって、どうつながるのって聞かれるときがあるのですけど、やはり今の幸せとか、今のいいものもつないでいきたいし、昔から来ている宝物っていっぱいあると思うんですけど、長門にもいっぱいあると思うんですけど、それをちゃんと大切にしていきながら、次の世代の人たちにそれを残していくという、これからの幸せっていうものを考えられる、それがサステナブルとウェルビーイングの関係かななんて、聞いていて思っておりました。ありがとうございます。

市長、何か言い残したことは。

○**江原達也**　今日、本当にお三方とのお話をもっと聞きたくて、私もいろいろ言いたいことを２時間分ぐらい考えていたのですけれども、大変残念で申し訳ないです。葦津宮司には、去年もこのパネラーとしてここに登場していただいて、お話しいただいた、本当に海ごみゼロを目指して長門も一生懸命やっておりますし、当然、海は県境も国境もありませんので、しっかりとこれからも長門の、北長門国定公園合わせて、きれいにしていきたいと思っておりますので、また協力できるところもたくさんあると思いますので、しっかりと御協力していきたいというふうに思います。どうぞよろしくお願いします。（拍手）

○**島田由香**　ありがとうございます。ぜひリベンジの会を、またやっていただければ、よろしくお願いします。ありがとうございます。

○**江原達也**　他の公務がありますので、ここで失礼させていただきます。（拍手）

○**島田由香**　市長、ありがとうございました。お気をつけて。

では、葦津さん、お願いいたします。

○**葦津敬之**　市長、ありがとうございました。２度目のお誘いをいただきまして、大変光栄に存じております。

少し自己紹介をしろということでございますので、自己紹介をさせていただきたいと思います。私は福岡県の、今現在は宗像大社の神主をしております。それ以前は、長いこと25年ほどですか、東京のほうにおりまして、神社本庁という、神社を統括している事務所におりました。いろんな御縁があって、もう30年以上前ですけれども、環境問題に取り組めという命令が下りまして、当時は、まだそんなに環境問題のことは話題になっていないテーマでありました。主に、神社には鎮守の森という森がありますので、その鎮守の森と環境問題について、いろんなことをやれということで、その仕事をやっておりました。

その後、今から10年ほど前に、宗像のほうに転任になりまして、そこでもう環境問題をやることはないだろうというふうに思っておったんですけれども、どうやら海の状態がおかしいということで、森でやってきた人間だったんですけれども、宗像に転任して、海のほうに変えまして、海の環境を今やっているということで、今日、お招きをいただいたのではないかというふうに思っております。

テーマをつけろということでございましたので、私のほうは常若というテーマをつけております。前回も少しお話ししたかもしれませんけれども、サステナブルだとかSDGsという言葉が、今、世に氾濫しておりますけれども、私どもは、ちょっと味気ない、大和言葉でそこを表現しようということで、常若という言葉を使っております。これは実は造語でございまして、きちんとした定義がないのです。その定義を我々もいろいろ考えていって、この常若をできれば海外に発信したいということで、これをテーマに活動を続けております。

単純に言うと、よく女性の方に常若と言うと、若く生き続けることが重要なのかと言われますけれども、そうではないのです。人間は死にますので。命をつなぐという、ざっくり言うとそういう意味が込められております。それは人間だけではなくて、植物も動物も命をつないでいくという、そういう意味が中心にあるということで御理解いただければと思います。

時間がないので、どんどんやっていきます。初めての方もいらっしゃるかと思いますので、宗像大社とは何ぞやというところでございます。日本神話に出てくる古い神社であります。宗像神社は三女神をお祀りしております。天照大神の三女神でございます。それぞれ島に、沖津宮って書いてある、神の島、沖ノ島といいますが、そちらに長女、それから大島に次女、それからこちらの本土に三女ということでお祭りをしております。

あと、宗像の大きな特徴は、日本最古の歴史書と言われる日本書紀の記述に出てくるのですけれども、天照大神から御神直という、極めて稀有な命令が下っている神社であります。何て書いてあるかといいますと、宗像三女神、宗像の地に降臨をして歴代天皇をお助けしなさいと。そうすれば、歴代天皇が祭るでしょう。助けることはよく分かるのですけれども、お助けした

らお祭りをしてもらえるという、非常にユニークなものがあります。

その証拠というか、物が残っているのが、神の島沖ノ島から出土した約８万点に及ぶ国宝でございます。これはその一部でございます。

それは何を意味するかというと、宗像と朝鮮半島というのは極めて近いところにあって、簡単に言うと、日本が最初に開国をした国際貿易港というふうに御理解をいただければと思いますけれども、そういう中で、貿易、それから外交、それから国防的な機能を果たしていたと思いますけれども、朝廷と連携をしながら、そういう機能を果たしていたというふうに言われております。それをずっとやり続ければ、歴代天皇が祭るよということで祭られた神社ということであります。

それから、特に特徴なのは、こちらのパワポにも出ておりますけれども、神の島沖ノ島というのは、人が住んでおりません。古代のままの姿をそのまま残しているということで、非常に稀有な島を持っているところであります。

それから、６年前に世界文化遺産に登録をされましたけれども、非常に苦戦をしました。いろいろ苦戦の末、いろんな国々の方がいらっしゃるので、言葉を凝縮して各国の大使に訴えようということで、絞り込まれた言葉がスピリチュアル、エコロジー、アニミズムというキーワードで、頭文字、これは偶然だったんですけれども、SEAという、海になっていたんですけれども。

どういうことかというと、神社には、今、舎殿というものがどこにもありますけれども、実はその舎殿以前の形というのが宗像にあります。舎殿というのは、日本に仏教が伝来をされて建物が出来上がっていくのですけれども、それ以前は、石とか木が御神体となって、そこでお祭りをしていた。宗像には、そういう原型の形があるので、これを訴えていこうと。

かつてはアニミズムだとか、スピリチュアルというのは、あまり国際社会では認められていなかったのですけれども、環境問題の高まりとともに、実は非常にアニミズム文化というのが見直されております。それを知っておりましたので、そういうものを訴えていったということでございます。

実は、環境問題というのは、私、究極、心の問題だというふうに思っておりますので、こういうアニミズム文化というのは、実は日本に限らず、古代の昔は、人類が最初に踏み込む宗教の一つなんですけれども、あらゆるところに神様がいるという考え方です。少し一例を出しますと、こういうものなんです。これが神社の一つの原型というふうに捉えていただければいいと思います。昔は非常に理解をされなかったけれども、今は自然に神様がいるということ自体が人間の抑止力になるということで、非常に注目をされている考え方。僕は、日本人は世界に堂々と、こういう価値観を訴えていくと、非常に理解が深まるのではないかと。これは日本だけではないです。かつて、皆様の国々も調べていただければあったでしょうということで、心が一致すると思っております。

それから、今度26日から宗像国際環境会議というのを迎えますけれども、今年で10回目、10年目を迎えます。山口も恐らくそうだと思いますけれども、海水温度の上昇、磯焼け、それに伴う漁獲の減少、海洋ごみ等々で宗像が苦しんでおりました。なかなか継続は力なりとも言いますけれども、ようやく10年目を迎えてきたというところであります。山口のほうは若干水深が深いんですけれども、福岡の玄海灘は水深が五、六十メートルしかない、非常に浅い。したがって、海水温度が一気に上昇していきます。10年前に来たときに、既に表面海水温度が30度を超えておりましたけれども、今はもう既に表面温度がそれ以上に上がっていると思います。

温暖化で、最初の環境会議の草創期にIPCCの議長なんかも来てくれたんですけれども、そのとおりになっているんですが、台風の大型化、それから線状降水帯というものがこれから来ますよと。まさに九州はその第１号が来たわけですけれども。さらにめんどくさいことは、線状降水帯の後に大量のごみが海のほうに流れ込んでいくということで、今日もマイクロプラスチックなんかの問題がありましたけれども、これはまだ海の上に浮いているからいいんですけれども、海底ごみというものが相当流れ込んできています。今や宗像のほうの漁師は、暇なときには、これは何にもお金にならないんですけれども、海底ごみを引き上げるというような作業までやっております。

海というのは７割で、海の生態系がきちっとバランスが取れていれば海からいろんなものが与えられると。化石燃料も何もいらないんです。こういう部分をもうちょっとみんなに理解をしてもらおうかなというふうに思っております。これが環境会議の様子です。ここのところはずっと中継をしてきておりますので、こんな感じで。これはファッションショー。具体的に海の再生のエフォートとして、里山の竹害がありますけれども、その竹を切って魚礁を作って、そこに鉄分が

入った重りを入れて海に沈めております。鉄分が藻場の再生をするというのは、昔からある話なんですけれども、山にある鉄とフルボ酸が融合してフルボ酸鉄になって、それが藻場を再生するということで、重しに鉄分を入れてやっているということであります。これが宗像のごみです。本当に毎日のように押し寄せてきます。

それから、これは神の島、沖ノ島のごみです。台風11号、2022年の台風が来たときに職員に行って撮ってくれということで、本当にひどいものでございます。こういうごみは、我々は船をチャーターして拾い上げて、持ち帰って処理をしているという状態であります。

それから環境会議で毎年宗像宣言を作って、環境大臣のほうにお持ちをしたりしております。時間があれなので、この辺を飛ばしていきます。

先ほど冒頭で言いましたように、精神性や心の問題も含めて、我々は常若を表現していきたいということで活動をやっているということです。CO_2の削減など、いろいろな環境問題の取組が複雑になっているのでよく分からないんですけど、私は単純にとても大切な自然を壊している場所、これをまず再生すること、これが極めて重要だと思っております。自然再生事業というのは昔あったのですけれども、今もやっていると思いますけれども、基本は自然を元に戻すということ、これに重点を置くべきではないかということで、今日は来ておりませんが、中井前事務次官にもずっと言い続けているということでございます。それから、我々が最後に目指すのは、神々が住む海、神が静まる海、神々しい海を取り戻そうと。神様がいるごとき海を取り戻そうということで、みんなで共有して活動しているということでございます。

すみません、ちょっと長くなりました。（拍手）

○**島田由香**　ありがとうございます。すぐにいろいろ私も聞きたいことがいっぱいあるくらい、ひらめきをいただいたプレゼンテーションだったと思うのですけれども、そこはパネルのほうに残させていただいて。

じゃあ、水谷先生のプレゼンテーション。自己紹介、さっきありましたけれども、また別のお話を伺えるということですので、お願いいたします。

○**水谷由美子**　何回も出てきて申し訳ございません。

企画している人間がでしゃばっているようですが。長年やってきた、まとめも含めまして、昭恵夫人が、あなた、発言したらどうと、というようなことがありましたので、今回は本当に何回も出させていただきます。よろしくお願いいたします。

私は山口県立大学に28年間勤めておりまして、昨年卒業いたしまして、にもかかわらず同じことを今も頑張っているということでございます。

それで、今日は、先ほど手仕事の話をしたのですが、海と陸の地域資源を活かした服飾デザインをやってきた活動を簡単に紹介をさせていただきたいと思います。

私どもは昭恵夫人と2013年からアグリアートフェスティバル、そしてブルー＆グリーンアートプロジェクトということで、農業文化の振興という活動をさせていただきながら、そこに海と陸をつなげた地域活性化に関する活動へと、本日の最初の昭恵夫人の御挨拶にあったようなことでございます。

それで、ここはリストなんですけれども、懐かしんでいただくために過去のリストを挙げました。2013年から今年で11年目になりますけれども、この長門市を中心に活動をしてまいりました。

2019年に「光の棚田」というテーマでアグリアートを終わりまして、ブルー＆グリーンアートプロジェクトということですね。これは、周防大島を舞台としてやらせていただいて、だんだん私たちの情熱といいますか、機会が加速度的になっておりまして、１年に１回ではなくて、もう１年に３回くらいやらせて頂いています。来年どうなりますかみたいな、そんな状態でございます。

それで、ちょっと振り返って、その中で、本当に服飾デザインの提案だけではなくて、生活の中に着られるものを商品化する。最初の紹介でも、そういった話をさせていただきましたけれども、振り返ると、山口のグローバル的なことを表すために、関係のある国のテキスタイルで、まずmompekkoを開発いたしました。

次に、具体的な商品開発は2014年からでございました。その後、安倍総理も、このラポールゆやに2015年に来ていただいて、ファッションショーの最後を飾っていただいたところでございます。農業文化では、早乙女の踊りというのを地域でやっていらっしゃるんですけれども、新しい早乙女の衣装デザインをいたしまして、一緒にファッションショーで舞台を共有しました。これは2017年ですけれども、プリントで、ここにありますように、夜の東後畑の棚田とか、昼間の晴れた元乃隅神社、そして夕暮れの元乃隅神社の風景を音楽ソフトでスキャンしまして、そのスキャンする途中に出てくる縞模様を加工いたしまして、新しい柄を地域のまさに風景から縞を作るということでやったものでございます。

これは2018年で、mompekko cosmoと命名したも

のです。昭恵夫人には毎年モデルとして登場していただいて、本当に楽しい会になっておりました。とにかくモンペッコ、サロペッコ、ツナギッコというふうに楽しい名前をつけまして、商品化をしてまいりました。

長年の夢であった、ホールではなくて、まさに畑の中で、棚田のエリアの活性化というのを目標に2013年からやったわけですけれども、初めて後畑の畑でやったものですね。これは後畑の棚田を振興するNPO法人ゆや棚田景観保存会の皆様が舞台まで作っていただきまして実現いたしました。

そして2021年、これはスモックッコというものを開発しましたけれども、西洋では仕事着にスモックを大人も使っているものなんです、日本では幼稚園児の服として活用されています。そこから着想を得て作ったものでございます。これは私ども、周防大島や防府市の野島におきましてビーチクリーンをいたしますと、瀬戸内海は広島の牡蠣を作る養殖の棚に牡蠣パイプというのが使われているのですけれども、それが山口県にすごく流れてきておりまして、そういうことがビーチクリーンをやることによってその状況が分かったんですね。それをこの山本成美さんが作品に作っているものです。これは周防大島では、今、ニホンアワサンゴが世界一、日本一大きい生息地があるということで、それも天候や温暖化やいろんなことでその生息地が小さくなったり、また成長して戻ったりいろんなことを繰り返しています。そういったものを服飾の表現においてメッセージを伝えていくということで、ウェディングドレスとしてこれは作ったものです。パンツは、左の男性のはセーラーの人のパンツのスタイルからアレンジしていますし、女性はちょっと見えていませんが、サルッパカマというですね、東北のほうの山仕事のためのパターンを活用しまして、まさに海と陸の結婚をテーマにさせていただいたものです。もともとこのアイデアは、NPO法人 森は海の恋人 理事長の畠山重篤さんの活動を昭恵夫人から聞いて、触発されたことに発しています。畠山さんには、旧文洋小学校で開催させていただいたシンポジウムに来ていただきました。畠山さんは気仙沼で牡蠣養殖をされていて東日本大震災で大きな被害を受けたんだけれども、日頃から山のほうの整備をしていたので、次の年には牡蠣が食べきれないほどのプランクトンが成長していて、それで本当に救われたということです。そんなお話も伺った中で、こういったことに関心を持って私ども進めてまいりました。

このスライドに見られるニホンアワサンゴの赤は夏の状態、冬になるとすごくきれいな緑になるんです。ニホンアワサンゴのヴィジュアルに着想を得てテキスタイルデザインをしております。

これは２年ほど前に、ニホンアワサンゴの生息地を守るメッセージを込めてデザインしたものです。こちらに今日は周防大島を代表されている柳居俊学山口県議会議長がアイデアを出されまして、アロハシャツを新しく作ることになりました。当時私は県立大学のメンバーで、共同研究のお話をいただきまして、周防大島高校の生徒さんのために、上のグリーンとブルーのデザインをさせていただいたんですね。そして今は、７色のデザインを展開しています。県大の最後の仕事が現在は商品化され、周防大島町で販売をされていることは嬉しい成果です。

まさに環境メッセージのそういった服が生活の中で着ていただけているということは非常に幸せなことでございます。このベースはちょっとよく見えないと思うのですけれども、ニホンアワサンゴの写真をデジタル処理をいたしまして、地はアワサンゴ、そして周防大島というのはみかんの島ということで、みかんの花をデジタル的ではなくて手描きふうにアレンジして作らせていただいたものです。

ということで、私は長年こういう山口の各地域をテーマして28年間、山口県立大学を職場として活動してまいりました。県内では地図に起こすとこんなことでございました。ちょっと自分の自己宣伝みたいでしたけれども。それで、陸の文化からの着想としてはこのようなことで取り組んだのですけれども、現在、ビーチクリーン、漂流物のデザインの発想とか、地域の自然を守るためのメッセージとしてのデザインということをやっております。

課題は、今までの活動を継続して、より地域に愛され求められるものをデザインしていくということと、そのためには仲間が必要です。課題解決に向けては、課題を共有し、共感を覚え、共同して共創に向けて行動に移っていける緩やかな集まりであるBGAPクラブを作りたいと思っています。皆さんへのメッセージでございまして、それで、今日の皆さんにお配りしたプログラムの裏側に、発信先ありますので、メールアドレスなどを登録していただけると案内状を送らせていただきたいと思います。まずは、聴講から始め、次に共に行動する仲間になりませんかということで。これからも、私は退職しましたけど死んだわけではありません。エネルギーが有り余っておりますので、皆様のお持ちのエネルギーと一緒に融合させて、この山口を

よりいいウェルビーイングな場所にして、世界に発信していけたらいいなと思ってこれからも活動していきますので、どうぞ仲間になってください。よろしくお願いいたします。ありがとうございました。（拍手）

○島田由香　ありがとうございます。３人の方のプレゼンテーション、それと自己紹介、やってくださっていることを伺いまして、そこにウェルビーングってどう関わってくるのかというところを私もこの後伺っていきたいんですが。

まずは、昭恵さん、今まで聞いていて、何か感じていることとか質問とかあるでしょうか。

○安倍昭恵　午前中のロックフェラー夫妻の発表と、今の水谷先生の発表を聞いて、自分自身がいろんなことをやってきたんだなということを改めて感じますけれども、もちろんウェルビーングもいいしSDGsもいいんですけれども、先ほどの葦津宮司の常若というのが私はその言葉がすごく好きで、日本にはやはりすごく大事な文化がたくさん残っていて、海外からSDGsって言われなくても、実はずっとSDGs的なことを日本はやってきたはずなんですよね。なので、日本的なものをもっと自信を持って海外に発信していっていいのではないかなというふうに思っています。

先ほどアニミズムの話が出ましたけれども、先進国と言われる国で、アニミズム的なものが残っている国というのは、ほぼ日本だけ、残っているというのは少数民族が残していたりとかもちろんあるのですけれども、国として神道みたいな形で、八百万の神を国民全体が信じている国というのはほかにないんじゃないかなと思うんです。それはすごく大事なことで、私たちは何に対しても神を見て感謝をする気持ちを持っているというのが、やはりこれから生きていく上でとても大事だと思うので、日本がそれを自分たちの誇りとして、日本の精神性として世界に発信していくことが、今いろんなところで戦争が起こったり紛争があったり、悲しいことがたくさんありますけれども、日本としてできることというのがあるのではないかと、それを皆さんと一緒にこれから考えていきたいなというふうには思いますし、何よりも、私もいろんなことがありましたけれども、常に自分をどうやったら御機嫌な状態にしていられるかというのを、これからも考えていきたいなというふうに思います。（拍手）

○島田由香　ありがとうございます。今、昭恵さんからありました、自分をいつも御機嫌な状態にしておくという。これ、さっき私もちらっと申し上げた、ウェルビーングって自己責任ですって。冷たい言い方なのではなくてすごく大事なことでして、これって自分のことが分かってないとなかなかできなかったりします。でも、自分だけで解決しなくてよくて、人と一緒にいるのはやっぱり助け合いながら、シェアしながらやっていく、手をつなぎ合っていくという、こういうことにもつながるのかなと、今、伺っていて思いました。

すみません、私は進行しながら、これが一体何時に終わればいいのか、既に時間が過ぎていると思うのですけれども、いつまででも喋り続けられるので。あと10分と御指示をいただきましたので、10分間、いろんな、お互い質問とかをしあいながらやっていければと思うんですけれども。

葦津宮司からのお話、今、昭恵さんからもありましたけれども、私もすごくはっとさせられるお言葉がいっぱいありまして。まず、そのトコワカという、このヤマト言葉って、実はあんまり日頃使ったりとか聞いたりとかしていないけれども、聞けば聞くほどよく聞かれるんです。ウェルビーイングの日本語って何ですか、ウェルビーイングじゃなくて日本語で何か言えませんかって。なんかここにすごくつながるヒントがあるなと。特に、心の問題、環境問題って心の問題とつながると思うという、ここがすごく私ははっとさせられたのですけれども。

葦津宮司にとってですね、御自分のウェルビーイングというのを考えていたときに、今日プレゼンテーションしてくださったこの内容って、どんなふうにつながってくるんですか。

○葦津敬之　なかなかそこの部分を僕がよく理解していないのですが、いずれにしても心の余裕もなくずっと数十年生きているような感じもするし。ただ神社という場は、やっぱり古代の人たちが大切にしたことを永遠とつないでいる場所でもあります。だから、神社が何で環境問題をやるのだという人もいますけれども、理屈は簡単で、自然が壊されるということは神様が壊されるということですから、当然その神社としてはそこに対して少し警告を鳴らさざるを得ないというところですよね。それから生活、暮らしの部分でいうと、言霊という言葉がありますけれども、やっぱり悪い言葉を吐けばそれが戻ってくる。なので、常に言葉には魂があるので変な言葉は使わないとかですね。昭恵さんのほうもおっしゃられましたけれども、日本人というのは本当に全てのものを実は持っていて。そこに神社というのはタイムカプセルというようなこともよく言われるのですけれども、神社の中にあるものを、私らは本当にど真ん中にいるので、実は全く気づいて

いないパターンが多いんです。だから、逆に周りの方から神社を見たときに、ああこういうことかというふうに逆に教えてもらいたいというか。我々はもう昔の古代の人たちから引き継がれてきたものを、大切な部分だけを繋いでいるだけでありますので。恐らくもっともっと神社の中にはそういう先人たちが培ってきたノウハウというのがあるんじゃないかなというふうに思っています。答えになっていないですね。すみません。大丈夫でしょうか。

○**島田由香**　とんでもないです。ありがとうございます。なるほどと思いました。自然が壊されていくイコール神様が壊されているということと一緒だと。

この言葉を聞いて私たちは何の疑いもなく、ああって思えるというのが、多分昭恵さんがおっしゃられた、八百万の神とともにいつも私たちは一緒にいると。これは世界の中でもとても特徴的。日本が、私たちが日本人で日本に生まれて育ってというところで、すごく自信を持ってというか、もっともっと発信していいんだというところにつながるということなのだなと、聞いていて思いまして。

そうちゃん、私は小原さんをそうちゃんと呼んでいるので、そうちゃんは環境省、政府の国のという観点からもお話しくださったんですけど、でもこの地域循環共生圏というものの中には、例えば地域って必ず神社あるじゃないですか。ある意味神社とともにあるというか。今の宮司の話を含めまして、改めてそうちゃんが環境を伝えたいと思うこととか、昭恵さんのお言葉からのひらめきとか、何かあったらぜひ伺えればと思います。

○**小原壮太郎**　僕は14年、有機農業を広げる活動をしているんですけども、それは実は僕が働いていた広告会社で、鬱病が実はすごく増えていて、僕、労働組合の代表委員やっていたのですね。医療費の使用ランキングを出したら、１位が鬱病かなと思ったら１位がアトピーで２位が鬱病だったんですけども。みんななかなかいい病院に行っても、薬を処方していただいて、緩和はするのですけども、根治しないのですよね。今、環境省のアンバサダーには、いろんなアーティスト、タレントのメンバーがいるのですけども、みんなやっぱり20代、突っ走って仕事をガンガンしてきて、みんな救急車に運ばれたり、いろんな病気発症して、ボロボロになって。実は私自身もそうだったんですけども、初めてオーガニックな野菜と玄米を食べたら、僕の場合は顔中から透明な液体が８日くらいにドロドロに出続ける体験をして。いわゆる医者の友達にも相談したら、体の中にたまっている重金属とかいろんなものがキレート作用ということで、出ているよと。

要は、今の現代ってとっても便利で、食べ物もコンビニに行けばいつでも24時間買えるし、長持ちするし、安いし。ところがやっぱりそれを実現するために、先人が工夫してそれを生み出してくれた科学文明の便利さの裏側で、やっぱりそれが体の中に蓄積して、負の作用も起きているということを自分でも実感しました。逆にそういうものに依存しないで作られている食べ物を食べると、元に体が戻っていくという自己体験をしたことによって、じゃあこれから地域を活性化していくために、もともと原始的な農業が増えていけば収穫量が下がるにしても、人の健康度合いは高まっていくなと。それで地域をもう一回活性化していったら、きっとみんなのウェルビーイングが上がるなっていうのが原点だったんですね。

なので、実はその中井前事務次官ともいつも話すのは、やっぱり人間のもともと本質的な活動とか、自分の体とか心に気持ちいいものとか、おいしいもの、嬉しいものをもう１回見つめ直して、効率とか経済性重視じゃなくて、自分の心と体が本気で喜ぶものを忠実に選んでいく。そういう方向に自分の人生をシフトしたいと思ったら、有機農家になって地域に移住するとかというのが、むしろさっきお話したように、政府としてもそういう自立分散型の社会を作るということが、持続可能ないい社会を作って、地球の中さえも改善していくんだよというところに、もう帰結するようになっているのです。だから、やっぱり、僕は皆さんに自分自身の感性に従って、本当にウェルビーイングな、御機嫌な状態になるものを選んでいただく。そういうものを作っている、作り手の方を応援する。少し値段が高かったとしても、そういう環境を丸ごと支えようとしてくれている作り手を、さらに応援していこうみたいな、消費者としての選択で、そういう社会を作るってところにも進んでいただくと、結局自分のウェルビーイングも高まっていくってところを、僕は自己体験から始まったので、皆さんにお伝えしたいなと思います。（拍手）

○**島田由香**　ありがとうございます。御自身の経験と体験が、話を聞いていて、環境省だったり日本の政府だったりって、すごく大きなことに聞こえるけど、でもそれがもう組み込まれているんだなって、いうのを感じられたのもすごく、私も改めて、やっぱりカタカナ言葉だけれども、ウェルビーイングというのは本当に私たちにとって大切なことなんだなって。しかもそ

れが地域から、地域の皆さんとともにやっていくということの大事さをすごく感じました。

先生、先ほどのお話の中で、先生これからさらに地域に愛されるものというのを作っていくというような言葉があって、これまでも今日御紹介いただいた様々な紙であったり、織物であったりって、やっぱり先人の方たちが暮らしの中で、営みの中で培ってきた知恵と、それが宝物だと思うんですよね。それを使いながらさらに地域に愛されるものを作っていくって、これ私すごく、先生にとってもそれがハッピーなんだと思うんですけれども、そこは先生にとっての地域のウェルビーイングというのはどんなふうにつながってくるんですか。

○**水谷由美子**　そうですね。ここの地域に限らないんですけれども、私たちの生活の中で、ものを作るという喜びとか楽しみという機会が、非常に現在は奪われているわけです。お料理にしても、コンビニだけでも生きていけるわけですし、服も、既製品を全て購入したらそれでいいし、安いし、みたいな。お祭りもだんだんなくなってきて、昔はお祭りのときにいろんな造形物やら装飾品とか着るものとか飾りとか、そういうものを作って、地域ぐるみでいろんな創造的な活動を共有していたわけですよね。どんどんそういう創造するということよりも、消費するだけということの生活がまずは強い時代になってきて。そしてその地域に固有の手工芸、先ほど挙げた、長門紙縒、つまり長門細工という言葉があったというのを、最近初めて知ったわけですけれども。地域にはほかにはないような誇れるものが、実は伝統にあったのだけれども、現代生活ではそういうものが知られなくなったり、見えなくなってしまっているのです。けれども、その地域の何か風土とか、人の知恵とか、つながりとか、そういうものがその地域ならではのものを実は作ってきていた。それをこういう活動を通じて皆さんにお伝えして、そしてそれを創造活動と一緒にやって、どんどんメッセージを発信していくということですかね。そういうことが地域の誇りをみんなで生み出していけて、それがウェルビーイングの楽しさとか、心地よい状態が得られる。やはり真似するとか追随するとか、メディアにすごくかっこよく示されていることだけがいいというよりは、もっと身近にものすごくすばらしいものがあるということを、私は服飾で伝えたいと思っています。最近は織物も素人的にやり始めたわけですけれども、織る行為もとても楽しかったので、そういうことが地域の生活する中のウェルビーイングにつながっていくんじゃないかなと思っております。ありがとうございました。（拍手）

○**島田由香**　ありがとうございます。自分たちも地域の誇り、自慢できるものがいっぱいあるから、それをどんどん発信していくという、そんなことにもつながるのかなと伺っていて思いました。

では、昭恵さん、コメンテーターとして、総合的にご発言をお願いします。

○**安倍昭恵**　皆さんお腹空かれていると思いますので、（笑声）そろそろ終わりにさせていただきますけれども。

今日はモデレーターで来ていただいたんですけれども、島田由香さん、ウェルビーイングの専門家みたいな形ではありますが、もともとは外資系の大きい会社の人事の取締役を最近までされていて、すごいバリバリに働かれていた方で、年はちょっとだいぶ下ですけれども、私は本当に尊敬しているんですね。今日は本当に無理を言って来ていただきました。

彼女は今その会社を辞めて、本当に地域のために駆けずり回っていて、彼女がやっていることの１つが、和歌山県で梅農家さんのお手伝いにみんなで行くという、この地域の方たちもちょっと参考になるんじゃないかなと思うんですけれども。梅農家さんも人手不足で大変な中で、梅って割と誰が取っても取れるんですね。桃とかだとやっぱり素人がなかなか取れないと思うのですけれども、本当に100人くらい、１か月間に100人、150人くらい、みんな、私は去年から２日間くらいずつしか行っていないんですけれども、その間に梅を取って、梅の香りを嗅いで、汗を本当にかいて。そうすると、その行った人たちはみんな東京とかで、もう頭パンパンでパソコン画面の前で働いているような人たちだったりするんですが、それがもう肉体労働をして、とってもそこでリフレッシュして、またこれで仕事頑張れるって。逆に、その梅農家さんたちは普段家族だけでやっていて、あんまり奥さんと会話もない梅摘み作業が、いろんな方たちが来られて、ものすごい刺激を受けて、両方がウィンウィンで、本当にすばらしい活動なんですね。

そういうふうに地域と都会だったり、ほかの地域が混ざっていくような、何かそういう取組をこの長門、下関で、私も一緒になってやっていけたらいいな、そこにウェルビーイングが生まれたらいいな、そのときに皆さんには、この長門だったり下関だったりを本当に愛して、私たちの長門はこんなにすばらしいんですよ、私たちの下関はこんなにすばらしいんですよ、と

いうところを大いに、ほかから来た人に発信していただきたいですね。よく、ここはもう何にもないけんって皆さん言われるんだけど、何にもないんじゃないんです。本当に宝の山なので、みんなで宝探しを私はこれからしていきたいなと思っているので、よろしくお願いします。ありがとうございます。（拍手）

○**島田由香**　ありがとうございます。梅収穫ワーケーションということなので、ありがとうございます、御紹介もいただいて。でも、なんか改めて思いました。私は長門に何回か来させていただいて、本当にその自然の豊かさと、実は私がこの地域のことを始めた一番のきっかけは、山口県に昭恵さんに連れてきていただいたことが最初なんです。東京生まれ東京育ちで田舎がなくて、どちらかというと海外に出張していたりとか海外旅行というのが多かった中、初めて山口に来るって言っていただいて、訪れたこの山口の自然に、私は本当に心を打ち抜かれたんですね。この水の美味しさとか空気の美味しさとか山の青さ、空の広さ、そして何より実はさっき漁師さんがコメント下さっていましたけれども、漁師さんだったり農家さんだったりという人のエネルギーに触れたことが実はきっかけなんです。なので、そんな長門でそういった活動が起きたらすごくすばらしいと思いますし、本当に最後になりますが、皆さんが本物に触れていくとか、自然というものだって本物だと思うんですよね。本物に触れたときに私たちが感じる感情、嬉しいとか楽しい、美味しい、これが１番のウェルビーイングのきっかけです。ポジティブな感情というんですけれども、これをぜひ、暮らしの中でちょっとしたときに感じていく。今はポジティブな感情を感じたんだって感じるだけで実はウェルビーイングが上がるということが分かっているので、今日のセミナー、セッションも、とってもたくさんいろんなお話があって、何か皆さんのウェルビーイングが上がるきっかけの１つになっていたらいいなというふうに思います。

　ということで長くなりましたが、すばらしいパネル、そしてプレゼンテーション、コメントありがとうございました。

　以上になります。（拍手）

○**司会**　島田様、そして皆様ありがとうございました。いま一度御登壇いただきました皆様に大きな拍手をお送りください。（拍手）ありがとうございました。（写真9）

※以上については必要に応じて改編した。

写真撮影　貝崎 健（フォトグラファー）
英語文字起こし整文の校正
　　シドニー・マイケル（山口県国際交流員）

写真9　会場（ラポールゆや）

付録Ⅱ

The Sea, Land and Wellbeing – Happiness is found in Handwork –

Blue & Green Art Project BGAP 2023

Blue & Green Art Project BGAP 2023

2023年10月22日 SUN

時間 10:00～13:10

場所 ラポールゆや

〒759-4503 長門市油谷新別名833
☎ 0837-33-0061

10：00 開演・挨拶
10：05 基調講演
11：20 展覧会
オープニングセレモニー
11：50
13：00 シンポジウム

【企画】安倍昭恵・水谷由美子
【主催】ブルー＆グリーン アート
プロジェクト BGAP 実行委員会
【後援】長門市
【協力】山口ファッション＆テキスタイル研究所
Y-FATI / 山口企画デザイン研究所 /
山口日本フィンランド協会
【助成】公益財団法人東芝国際交流財団

TOSHIBA
公益財団法人 東芝国際交流財団

主催者挨拶

ブルー＆グリーンアートプロジェクト実行委員会　会長
安倍 昭恵　Akie Abe

ブルー＆グリーンアートプロジェクトはアグリアート・フェスティバルの後継として、2020 年から活動をしてまいりました。海と陸を連携させた環境への取り組み及びアートを通じた地域文化創造や地域活性化を目指して、現在まで長門市、周防大島町、防府市及び山口市において活動をしてきました。
今回は世界規模で環境や社会問題の改善に向けて、積極的に取り組んでおられるデイヴィッド・ロックフェラー Jr, 及びスーザン・ロックフェラーご夫妻を山口にお招きしました。おふたりにはフィールドワークもして頂きました。基調講演でのお話が楽しみです。最後に本日のイベント開催にご協力ご支援を賜りました皆様にこの場を借りてお礼を申し上げます。お越しいただいた皆様におかれましては、シンポジウム及び展覧会をお楽しみ頂ければ幸いです。

来賓挨拶

山口県議会 議長
柳居 俊学　Shungaku Yanai

ブルー＆グリーンアートプロジェクト BGAP 2023 の開催を、心からお祝い申し上げます。
さて、持続可能な社会の実現に向け、多様な主体が、それぞれの役割を認識し、必要な取組への積極的な参画が求められる中、本日、海と陸の環境と人間の関わりについて、ウェルビーイングの観点からシンポジウム等が行われますことは、大変意義深いものと感じています。
この取組が、より良い未来に向けて考え、個々の活動へ繋げることができる機会となるよう念願いたします。

公益財団法人　東芝国際交流財団　元理事
白井 純　Makoto Shirai

「海と陸とウェルビーング～幸せは手仕事に宿る～」をテーマとする国際シンポジウムの開催おめでとうございます。山口の裂織（サキオリ）とフィンランドの同様の裂織を通じた交流を実施し、グローバルな参加者と共に、現代における生活の価値や手仕事の可能性について意見交換を行うことは、とても重要な価値創造であると思います。これらも山口で培われた文化を土台に、世界と共に持続可能な未来創造を目指す取り組みを続けて下さい。

企画について

ブルー＆グリーンアートプロジェクト実行委員会　実行委員長
水谷 由美子　Yumiko Mizutani

今回は「海と陸とウェルビーイング ～ 幸せは手仕事にやどる ～」をテーマに、シンポジウムを開催します。今までのシンポジウムで海の問題解決のために陸の整備が欠かせないこと、それを実現するためには地域の人々の理解と実践が大切であることなどが示されました。今回は環境への取り組みが、自然と人間の関係、あるいは自然保護、また地域の人々の精神や身体の良好な状態をいかに生み出していけるかを考える機会とします。
展覧会においては、手仕事を通じてかつて、全ての人々が生活の中で創造活動に携わっていたことを、改めて想起する機会とします。私たちは便利な生活道具や既製品を受容することが常態化して久しく、ＤＸ 時代が進展する今日では、自ら創造する意識、意欲及び機会が失われています。作品をご覧頂き、皆様の創作意欲が喚起されましたら幸いです。

プログラム

【司会】高松 綾香（アナウンサー）

開演・挨拶 （大ホール） 10：00～	ご挨拶　【会長挨拶】 安倍 昭恵（BGAP 会長・元内閣総理大臣安倍晋三夫人） 【来賓挨拶】 柳居 俊学（山口県議会 議長） 来賓紹介　吉田 真次（衆議院議員） 笠本 俊也（山口県議会議員） 畑原 勇太（山口県議会議員） 江原 達也（長門市長） 南野 信郎（長門市議会議長）
基調講演 （大ホール） 10：05～	【講演者】 デイビッド・ロックフェラー Jr.（ロックフェラー家第 5 代当主） ドキュメンタリー映画「Mission of Mermaids:A love letter to the ocean」 2012 年（監督：スーザン・ロックフェラー）上映 スーザン・ロックフェラー（映画監督・製作者　Musings 創設者） 井植 美奈子（一般社団法人セイラーズフォーザシー 日本支局理事長） 【通訳】　千葉 宗一郎（Y7/Y20 会長 世界銀行グループ YPP）
展覧会 オープニングセレモニー （コミュニティホール 関係者のみ） 11：20～	【特別友情参加 / 陶芸 萩焼】 大和 保男（山口県指定無形文化財保持者） 15 代 坂倉 新兵衛（山口県指定無形文化財保持者） 坂倉 正紘（陶芸家） 【ファッション・テキスタイル・生活デザイン】 山口ファッション＆テキスタイル研究所 Y-FATI 山口企画デザイン研究所
シンポジウム （大ホール） 11：50～ 13：00	・事例紹介 【発表者】 水谷 由美子（BGAP 実行委員長・山口県立大学名誉教授） 「山口のサステナブルな手仕事の伝統とデザイン」 ・パネルディスカッション 【パネラー】 小原 壮太郎（一般社団法人 the Organic 代表理事） 「森里川海と地域循環共生圏」 葦津 敬之（宗像大社 宮司） 「常若（とこわか）」 水谷 由美子 「海と陸の地域資源を活かした服飾デザイン」 【モデレーター】 島田 由香（一般社団法人日本ウェルビーイング推進協議会　代表理事） 【コメンテーター】 江原 達也（長門市長） 安倍 昭恵（BGAP 会長・元内閣総理大臣安倍晋三夫人）

基調講演

デイビッド・ロックフェラー Jr.
David Rockefeller, Jr.

ロックフェラー家第 5 代当主。ロックフェラー兄弟基金評議員、ロックフェラー＆カンパニー取締役。ロックフェラー＆カンパニー、ロックフェラー財団等、ロックフェラー家の要職を歴任。芸術のパトロンとしては、アジアンカルチュラルカウンシル、MoMA 美術館の評議員、高松宮殿下記念世界文化賞の日本芸術協会名誉顧問も務めている。
環境保全への取り組みとヨットへの情熱から、2004 年に非営利団体「セーラーズ・フォー・ザ・シー（SfS）」を設立した。2018 年、SfS は世界的な海洋保全団体であるオセアナと手を組み、そのプログラムのひとつとなった。ハーバード大学、ハーバードロースクール修了。

スーザン・ロックフェラー
Susan Rockefeller

Musings 創始者。(musingsmag.com)
オシアナ ボードメンバーの他、Stone Barns 農場、We Are Family Foundation、Asian Cultural Council、Peggy McGrath Rockefeller Foundation、David Rockefeller Fund、Land and Garden Preserve など多数の団体の理事を務め、Imagine のミッションボードメンバーでもある。また、MoMA の映画委員会、映画芸術科学アカデミー、外交問題評議会のメンバーも務める。映画監督としては代表作「Mission of Mermaids: a love letter to the ocean（人魚の使命：海へのラブレター）」があり、A Sea Change を含む 20 以上の高い評価を受けた映画の製作と共同プロデュースを行っている。ニューヨーク大学大学院修了。

【通訳】
千葉 宗一郎　Soichiro Chiba
Y7/Y20 会長　世界銀行グループ YPP

シンポジウム　パネラー

小原 壮太郎　Sotaro Obara
一般社団法人 the Organic 代表理事

オーガニック＆サステナビリティ推進プロデューサーとして全国有機農業推進協議会 理事兼事務局長、日本オーガニック会議 執行部、環境省 森里川海アンバサダー、日本ウェルビーイング推進協議会 理事、ノアソビ SDGs 協議会 理事、Media is Hope 理事、グラミン日本 アドバイザリーボードなど多数の団体のボードメンバーとして活動。

葦津 敬之　Takayuki Ashizu
宗像大社 宮司

昭和 37 年生まれ。昭和 60 年神社本庁に奉職、平成 8 年主事。総務課長、情報管理課長、域学課長、国際課長、同 21 年参事、財務部長、広報部長を経て、平成 24 年 4 月に宗像大社に奉職、同 25 年権宮司昇任、同 27 年 6 月宮司昇任、現在に至る。ライフワークは環境保全。宗像国際環境会議では、有識者とのシンポジウムだけでなく、藻場の再生のため、宗像の山から竹を切り出し「竹魚礁」を海に沈めたり、ビーチクリーン活動も行い、実践的に活動している。

水谷 由美子　Yumiko Mizutani
ブルー＆グリーンアートプロジェクト実行委員長

三重県生まれ。お茶の水女子大学大学院修了。山口県立大学名誉教授。服飾デザイン・服飾美学・サービスデザインを専攻。2002 年にヘルシンキ芸術デザイン大学（現アールト大学）大学院客員教授としてフィンランドに在住。2009 年から 10 年以上、ラップランド大学と共に、サステナブルと地域資源の活用をテーマとする共同研究を実施。その他、ハワイ、中国、韓国、フランス、カタール等の各大学との国際交流を通じたファッションショーを教育研究創作活動として実施。国内外で活躍するデザイナーなどクリエーターを多数輩出。

井植 美奈子　Minako Iue
一般社団法人セイラーズフォーザシー日本支局 理事長

京都大学博士（地球環境学）。米国ロックフェラー家当主のディビッド・ロックフェラー Jr. が設立した海洋環境保護 NGO である Sailors for the Sea のアフィリエートとして日本法人を設立。水産資源の持続可能性を示す『ブルーシーフードガイド』、海洋スポーツの環境基準『クリーンレガッタ』等のプログラムの開発と運営による啓発活動や政策提言を通して、海洋環境の改善から持続可能な社会の実現を目指している。オフィシャルコラムニストとして、Forbes Japan に「海洋環境改善でめざす持続可能な社会」、25ans に「井植美奈子の SAVE THE OCEAN」の連載を執筆中。
http://sailorsforthesea.jp

シンポジウム　モデレーター

島田 由香　Yuka Shimada
一般社団法人日本ウェルビーイング推進協議会 代表理事

株式会社 YeeY 共同創業者・代表取締役、アステリア株式会社 CWO。慶應義塾大学卒業後、パソナを経て、米国コロンビア大学大学院にて組織心理学修士号取得。日本 GE で人事マネジャーを経験し、ユニリーバ・ジャパン入社。取締役人事総務本部長に就任し、「WAA」など独自の人事施策を多数実行、Forbes WOMEN AWARD を 3 年連続受賞。2017 年に（株）YeeY を共同創業。企業の経営支援や人事コンサルティングなどを通じて、ウェルビーイング経営実現に取り組む。自身も 1 年の約半分をワーケーションで過ごし、地方自治体の人材育成やコンテンツ開発支援など地域住民のウェルビーイングを高める仕組みづくりも行う。

シンポジウム　コメンテーター

江原 達也　Tatsuya Ehara
長門市長

1963 年長門市（旧日置町）生まれ。県立大津高等学校（現：県立大津緑洋高等学校）卒業後、専修大学経済学部に進学。卒業後は株式会社みずほ銀行に就職。みずほヒューマンサービス株式会社を経て、2016 年に帰郷。2017 年 4 月から長門市議会議員を経て、2019 年 11 月 1 日から長門市長に就任。市長就任以来、市民目線による「市民が主役のまちづくり」を目指し、健康・医療・福祉・教育・生活環境の充実と地域経済の活性化に全力で取り組んでいる。

安倍 昭恵　Akie Abe
ブルー＆グリーンアートプロジェクト会長

聖心女子学院幼稚園から高等学校卒業。聖心女子専門学校英語科卒業。立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科修了。株式会社電通新聞局を経て 1987 年安倍晋三氏と結婚。趣味は、ランニング、ゴルフ、お茶づくり。2006 年から山口県立大学企画デザイン研究室と共同開発を開始し、2013 年からファッション創造による農業振興および地域活性化の活動を目指すアグリアート・フェストバル、その後継として BGAP を 2020 年に立ち上げる。2018 年から 2021 年まで山口県立大学大学院国際文化学研究科非常勤講師。

司会

高松 綾香　Ayaka Takamatsu
アナウンサー

2015 年　KRY 山口放送入社。熱血テレビや報道番組 MC を 8 年間務める。昨年、日テレ系列全国のアナウンサーから選ばれるアナウンス大賞で歴代最年少でラジオ部門グランプリを受賞。2023 年からフリーへ転向。

展覧会 出展者

◆特別友情参加 / 陶芸 萩焼◆

Yasuo Yamato
大和　保男
山口県指定無形文化財保持者

1960 年美術を志す。バルセロナ民族博物館に「街」・大英博物館に「炎箔四方皿」・ボストン、ウェルズレー大学に「炎彩流水文陶筥」が収蔵される。第 30 回伝統文化ポーラ賞優秀賞受賞。旭日小授章受章。山口県指定無形文化財萩焼保持者。山口県立大学特別栄誉教授。

「貝殻紋火焔鉢（かいがらもんかえんばち）」

古くは萩焼や唐津焼など、窯の棚板への熔着を防ぐため裏面の高台に貝殻を敷き焼成。そのため高台に貝殻紋が残る。しかし当作品は裏面ではなく、表面に緋色の貝殻紋を映し出すという、たぐい稀な装飾である。

「貝殻紋四方陶筥（かいがらもんよほうとうばこ）」

陶器の筥。土を刳り貫いて形成する。作品の表面に貝殻紋を残すという手法は世界にない。茶系の地色と貝殻紋と緋色がよく融和し、希少価値的な奇妙な美的表現を醸し出している。

Shinbei Sakakura
15 代　坂倉 新兵衛
山口県指定無形文化財保持者

昭和 24 年山口県長門市に生まれる。東京藝術大学にて彫刻、大学院で陶芸を専攻し、帰郷。昭和 53 年、15 代坂倉新兵衛を襲名。日本工芸会正会員。県指定無形文化財萩焼保持者。令和元年、旭日双光章受章。

「灰被絵皿」

萩の土に、異なる色土を用いて絵付けを施し、登り窯の、薪の飛び交う床近くに置いて焼くことで、下部が薪の灰に埋もれて黒く炭化し、絵皿に奥行きのある独特の表情を表した、15 代新兵衛を代表するシリーズのもの。今作品は木蓮を描いている。

Masahiro Sakakura
坂倉 正紘
陶芸家

昭和58年山口県長門市生まれ。父は十五代坂倉新兵衛。東京藝術大学、大学院にて彫刻、京都で陶芸を学び帰郷。明日への扉（ ディスカバリーチャンネル ）、ブレイク前夜（BS フジ) 出演。令和 2 年柿傳ギャラリーにて初個展。

「刷毛目花入」

赤土でロクロをひき、その上に萩の伝統白土であるを刷毛で塗り付けたもの。表面の青いは、植物の灰由来の自然な色味。下部の連続した穴のは、作家の得意とすると名付けたもので、穴に溜まる青い釉薬が、程よくアクセントとなっている。

◆山口ファッション＆テキスタイル研究所 Y-FATI / 山口企画デザイン研究所◆

木村 和枝　Kazue Kimura
山口とくぢ和紙振興会結の香 会長

「天、地、そして海」

着られなくなった着物と手作業のみで作られる和紙でドレスと帽子を制作した。男性用長襦袢の前と後ろを逆にして染め和紙でアンダースカートを制作した。帽子は海のイメージ。

おおうち あみ　Ami Ouchi
手作り工房幸 主宰

「花のマーメイド」

しっかりと撚りが掛かった細い部分と甘撚りの太い部分が交互に現れるスラブ糸を使用し表情を出すために敢えてローゲージでシンプルな編地にした。透け感がさわやかなロングドレスの裾を円型に形づけることによりシルエットを美しく見せる工夫をした。

小田 玲子　Reiko Oda
周南公立大学非常勤講師

「森と海の詩」

森は水の流れによって栄養分を海に届け、豊かな海を育んでいる。この密接な関係を蚊帳で表現した。水の流れを表した藍布は森の流した涙のようにも見える。森と海の営みが久しく続くことを願いながら制作した。

武永 佳奈　Yoshina Takenaga
倉敷市立短期大学 専任講師

「Evolving denim : Coexistence with aqua」

光沢のある薄地のキュプラデニムを使用し、デニム生産と関連深い水の流れをイメージし、デザインした。水を 70%削減したナノミスト加工を施した、環境にも優しい新感覚のデニムドレス。

山本 成美　Narumi Yamamoto
デザイナー

「心の声をきく」

Well(良く)Being(在る) とは。
社会的・経済的な安心の中に身があれども、幸福感を得られないことがある。最も重要で向き合うべきは自分自身の感情であり、自分が何に幸せを感じ生きているのか、考える。そうして行動をして初めて私たちは良い状態で在れるのだと思う。

甲斐 少夜子　Sayoko Kai
アーティスト

「Leaf & Wave」

森に生まれる木の葉一枚。大地に含まれる水は脈々と木に吸い上げられ、深い緑の葉の中へ。土中の水分は川へそして海へと流れ、太陽の光を浴びてエメラルドグリーンに輝く。葉脈の中に生まれる波と共に、母なる大地と父なる太陽に照らされている世界を表現している。

原田 裕作　Yusaku Harada
山口企画デザイン研究所 / 滋賀県立大学大学院生

「Kasanari」

布を幾層にも重ね、斜めに切り裂き、新たな布地を生み出す「スラッシュキルト」の技法を用いたワンピースとタペストリー。着物地をまばらに配置することによる、個性ある毛羽立ちや独特な配色を優美に表現することを目指した。

「生命～ Tsuzure ～(野島 Ver.)」

防府市の野島をテーマにした作品。野島は、全島に茂っていたツツジの開花時期には茜色に染まって見えたため「茜島」とよばれている。茜色の島、周りを囲む瀬戸内海、夜に沈む夕焼けの様子を、茜染めした生地を用いて裂織で表現した。

◆特別出展◆

故 淺田 陽子　Yoko Asada
初代 Y-FATI 所長 / ニットアーティスト

「帰森 Ⅲ」

森に立つ巨樹をイメージしてデザインした。地底から湧き上がる様な力強さと、巨樹の持つ静けさを表現している。
周防国分寺の秘宝「日光菩薩月光菩薩像」からもインスパイヤされた服飾造形作品。

大田 舞　Mai Ohta
MAIOHTA DESIGN / Designer

「海と山の宝物」

やまぐち x ロヴァニエミデザインウィーク 2021 のメインビジュアル用にデザインした柄を、深い海と生い茂る山を連想させる配色で新たに「リデザイン」した。１つのデザインから新しい創造性を生み出す挑戦である。

田村 真子　Mako Tamura
murmur 代表

「躍るように暮らすエプロン」

日々の暮らしは手仕事によって生まれている。単調にも感じる日々のリズムの中でいつも「心を躍らせて」いたい。そんな思いを踊った作品（コンテンポラリーダンス）の衣装として着用したエプロン。※2023 年 9 月公演

松永 美代子　Miyoko Matsunaga
東亜大学 非常勤講師

「和風籠と小物入れ」

祖母の着ていた古い写真を見て、今は亡き祖母の着物姿を偲んでいる中で思いつき、祖母の古着（大島紬）と和紙を融合させた竹籠と頂いた古い絣や端切れを使ってハナミズキの花を表現した小物入れである。

水谷 由美子　Yumiko Mizutani
山口県立大学名誉教授

「The Blue-Green Connection」

今回は「海と陸とウェルビーイング」の司会者の衣装をデザインした。海と陸の融合をイメージした手書きのグラフィックを加工して、プリントしたオリジナルの布を使用した。服飾デザインは上半身にドレープを効果的に使い、下半身はフレアでエレガントなイメージを演出した。
（制作：水谷由美子 / 下川まつ゛ / 田村真子　グラフィック提供：津村実奈）

「PEACE　裂織のビスチェとタイパンツ」

ビスチェは世界平和を祈る目的で、色彩を黄と青を基調に白で構成した。未使用のマスクを解いたガーゼをオーガニック玉葱の皮と藍の泥染めで染色した。その布や和紙を裂いて（切って）できた糸を緯糸にして織った裂織タペストリーをビスチェとしてアップサイクルした。ボトムはファスナーを使わないタイパンツスタイルのデニムパンツである。

下川 まつ゛ Matsue Shimokawa
山口県立大学 実習助手 / Y-FATI 所長

「渚」

海と陸が交わる波打ち際をイメージした。波や風によって作られる砂紋の造形から着想を得て、布にピンタックを施し、立体的にデザインした。絶え間なく変化し続ける海と陸の曖昧な境界線を表現した作品である。

田村 奈美　Nami Tamura
有限会社ナルナセバ代表取締役 / 早鞆高等学校・中村女子高等学校
非常勤講師

「紺碧の薫風」

初夏の頃、青空の中に緑が際立つ新緑の季節に森から海へと吹く心地よい風、薫風をイメージしたデザインを自身で育てた藍による藍染めで表現した。新緑の緑は玉ねぎ染めで黄色に染め、そこに藍染を重ねている。

荒木 麻耶　Maya Araki
山口企画デザイン研究所 / 京都女子大学大学院生

「WELLBA」

京都市にてバックの企画・製造を行う株式会社シカタと共同研究し、人間工学の視点から肩への負担を軽減させ、軽く感じさせるリュックを開発。快適な着用感とライフスタイルに寄り添ったデザインを追求した。

山口ファッション＆テキスタイル研究所 Y-FATI

山口県立大学 大学院 国際文化学研究科で服飾デザインの研究創作をした修了生たちによって 2013 年に結成されました。プロの研究機関として、地域の活動家や教育機関との交流、国際研究交流を通じて、プロやその予備軍を養成するとともに、山口県における芸術文化の振興と発信を目的として活動しています。

スタッフ

企画・運営	安倍 昭恵　水谷 由美子
総合プロデュース・ディレクション	水谷 由美子
制作	田島 美紀子
舞台ディレクション	原田 裕作
展覧会ディレクション	下川 まつゑ
グラフィックデザイン	津村 実奈
グラフィックディレクション	下川 まつゑ
映像撮影・編集・配信	入江 正敏・内山 久宜 (山口メディア研究所)
写真撮影	貝崎　健（フォトグラファー）
司会	高松 綾香（アナウンサー）

アグリアート・フェスティバル と ブルー＆グリーンアートプロジェクト　ヒストリー

アグリアート・フェスティバル　2013～2019

2013 年　農業スタイルコレクション 2013 in 長門油谷 with 会津若松（ラポールゆや、長門市）mompekko「グローバル」

2014 年　アグリアート・フェスティバル 2014　大地の声をきく（ラポールゆや、長門市）mompekko「raita」

2015 年　アグリアート・フェスティバル 2015　和敬清寂～夏は涼しく～（ラポールゆや、長門市）mompekko「takijima」

2016 年　アグリアート・フェスティバル 2016　自然との対話（ルネッサながと、長門市）mompekko「cosmo」

2017 年　アグリアート・フェスティバル 2017　The Force of Water 水の力（ルネッサながと、長門市）mompekko「nagato」

2018 年　アグリアート・フェスティバル 2018　リアル・アグリ～風と遊ぶ～（ルネッサながと、長門市）mompekko「motonosumi」

2019 年　アグリアート・フェスティバル 2019　光の棚田（ルネッサながと、長門市）mompekko「tanada」

ブルー＆グリーンアートプロジェクト ＢＧＡＰ　2020～現在

2020 年　海と陸の結婚（旧文洋小学校、長門市）

2021 年　海と陸の過去・現在・未来 ～和のサステナビリティで世界へ～（ラポールゆや、長門市）

自然を知り活かし豊かな暮らしをデザインする ～日本の和ハーブ、長門の和ハーブ～（旧文洋小学校、長門市）

ビーチクリーン＆シンポジウム：海の豊かさを周防大島における近未来の生活デザインに活かす

～SDGs から白木半島地区の可能性を探る ～（周防大島町橘総合センター、大島郡周防大島町）

2022 年　シンポジウム＆展覧会　民俗学者「宮本常一」に学ぶ地域創生～地域循環がある周防大島町のライフデザイン～

（周防大島町橘総合センター、大島郡周防大島町）

展覧会とワークショップ　海を巡るファッションの旅　Step By Step （ギャラリー ラ・セーヌ、山口市）

【サステナブルな地域創生に向けたハンドブック】
2020 年～2022 年 5 回分のシンポジウムを下記のエッセイの付録として採録。
「ブルー＆グリーンアートプロジェクト 2022 と地域文化創造の実践的研究
～ サステナブルデザインと「海を巡るファッションの旅 Step By Step」を事例として ～」
水谷由美子他、「山口県立大学学術情報　第 16 号」［国際文化学部紀要通巻第 29 号］、2023 年。

全てのプログラム及び展示作品は後日公式 Youtube チャンネルより配信。
Blue & Green Art Project　YouTube で検索

【BGAP クラブ会員募集】
ご入会をご希望の方は **bgap.club@gmail.com** にお名前とメールアドレスをご送信ください。今後のイベント情報をご案内します。

【問合先】ブルー ＆ グリーンアートプロジェクト BGAP 実行委員会事務局
〒753-0056 山口市湯田温泉 2-3-26-901
☎ 090-7776-9763　yumiko0911green@gmail.com